



# 課題フォルダ 一月～三月



小6までの課題フォルダには、暗唱検定用の暗唱長文の3ページのうち1ページだけを末尾に載せています。その先の暗唱長文は、ウェブで  
ごらんください。

<https://www.mori7.com/mine/as2.php>

# 教材の説明

## ▼作文ノート

2023年7月より、作文用紙と封筒用紙は、お送りしなくなりました。

作文については、市販の作文ノート120字詰、150字詰、200字詰などを各自でご用意ください。

作文は、写真で画像を撮り、作文の丘から送ることができます。

作文を郵送される方は、封筒を各自でご用意ください。

## ▼再発行料金

課題フォルダやシールの再発行を希望される場合の料金は、次のとおりです。

課題フォルダ：550円 住所シール：165円

課題フォルダはホームページでもごらんになれます。項目や住所の記載は、手書きでもかまいません。

各種用紙類は、学習の手引にPDFファイルとして載せていますので、それを印刷して使っていただいても結構です。

<https://www.mori7.com/mori/gate.php>

課題フォルダは、ウェブページから印刷することもできます。

<https://www.mori7.com/mine/kd.php>


## ▼欠席や電話先変更をする場合は

欠席や電話先変更をする場合は、ホームページからご連絡ください。担当の先生のメールに直接連絡が行きます。

しかし、この連絡メールには返信はありませんので、時間の変更依頼などの連絡は行わないようにしてください。

<https://www.mori7.com/outi/d/>

ユーザー名、パスワード、生徒コード（生徒コードはユーザー名と同じ。いずれも半角英数字）を入れて、「先生への欠席等連絡」というリンク先をクリックします。

オンラインクラス一覧表のご自分のコードの横にある（三角印）から欠席連絡をすることもできます。

欠席や電話先変更の連絡はお電話でも受け付けています。電話045-353-9061（平日10:00～17:00 土日10:00～12:00）

# 課題集 レンギョウの山

長文集 ◆横書き長文全文 ▲縦書き長文全文

★印がその週の主な課題です。(感)は感想文の課題です。

「絵池渚波」はインターネットのリンク先です。ヒントなどにリンクしています。<<http://www.mori7.com/mine/iwa.php>>

◆▲をクリックすると長文だけを表示します。◆横書きルビ付き ▲縦書きルビなし ▲縦書きルビ付き

週	課題	週	課題
1.1週 絵池渚波	○自由な題名 ○クリスマス、おおみそか、お正月 ★内申点、本当の豊かさ ある書物がよい書物であるか ◆△▲	2.3週 絵池渚波	○自由な題名 ○バレンタインデー、もうすぐ春が ★大相撲をはじめて見にいったとき(感) ◆△▲
1.2週 絵池渚波	○自由な題名 ○新学期、冬休みの思い出 ★農業は、きわめて恣意的な営みで(感) ◆△▲	2.4週 絵池渚波	○自由な題名 ○ひとりでいることと友達といること ★清書(せいしょ) ○その翌日であった。 ◆△▲
1.3週 絵池渚波	○自由な題名 ○寒い朝、体がぼかぼか ★われわれ自身は必ずしも意識して(感) ◆△▲	3.1週 絵池渚波	○自由な題名 ○ひなまつり ○窓、愛国心 ★今日では、道徳的共同体を(感) ◆△▲
1.4週 絵池渚波	○自由な題名 ○規則のよい点悪い点 ★清書(せいしょ) ○なにぶん絵本のことで、 ◆△▲	3.2週 絵池渚波	○自由な題名 ○春を見つけた、種まき ★イロリの社交は、家族結合の(感) ◆△▲
2.1週 絵池渚波	○自由な題名 ○節分、マラソン ○家族の対話、一夜漬け ★現代はアイデンティティ不定の(感) ◆△▲	3.3週 絵池渚波	○自由な題名 ○この一年、新しい学年 ★今、日本の都会では、路上で(感) ◆△▲
2.2週 絵池渚波	○自由な題名 ○雪や氷、なわとび ★私の英語力はほとんど(感) ◆△▲	3.4週 絵池渚波	○自由な題名 ★清書(せいしょ) ○要するに、ニューヨークは ◆△▲

# 項目表 レンギョウの苗

目標：家徽的な題名を主題化する書き方を身につける  
★重要・評価あり    ◎重要・評価なし    ○普通・評価なし    段落は大体の目安です。

第1段落	項目	キーワード	説明
構成	◎ 構成図	構成図    <<構成>>	構成図をかく
構成	○ 題名の工夫	題名の工夫    <<構成>>	「○○な○○」「○○の○○」のように工夫
構成	○ 四段落構成		大きく四つぐらいの部分に分けて書く
構成	○ 書き出しの工夫	書き出しの工夫    <<構成>>	会話・色・音・情景で書き出す
主題 【🌻】	★ 生き方の主題	生き    人間    生き方    <<主題>>	私は…生きたい

↓

第2段落	項目	キーワード	説明
構成 【🌻】	★ 複数の方法一	方法    <<構成>>	…の方法としては第一に
題材	◎ 体験実例	体験   私   わたし   僕   ぼく    <<題材>>	自分らしい体験実例を書く
表現	◎ たとえ	まるで    みたい    よう    <<表現>>	まるで…のよう
主題	○ 途中の感想		途中で主題に関連した感想を書く

↓

第3段落	項目	キーワード	説明
構成 【🌻】	★ 複数の方法二	方法    <<構成>>	…の方法としては第二に
題材 【🌻】	★ 伝記実例・長文実例	伝記    長文    <<題材>>	伝記の実例・長文集の実例
表現	◎ ユーモア表現	笑    爆    ユーモア    <<表現>>	ユーモアのある表現（笑）
表現 【🌻】	★ 詩の引用	詩    歌    <<表現>>	詩や俳句から引用する

↓

第4段落	項目	キーワード	説明
主題 【🌻】	★ 反対意見への理解	確かに    <<主題>>	確かにBもよいが、しかしAが
表現 【🌻】	★ 名言の引用	名言    言葉    ことば    <<表現>>	主題に合わせて名言を引用する
主題 【🌻】	★ 生き方の主題	生き    人間    生き方    <<主題>>	私は…生きたい
構成	○ 書き出しの結び	書き出しの結び    <<構成>>	書き出しのキーワードを使って結ぶ

字数	★ 1 2 0 0字以上	
表記	○ 決めてくる、読みかえす	書くことを決めてくる、書いたあと読み返す
表記	★ 9 0分以内	書き始めから書き終わりまで9 0分で
表記	○ 構成メモ	作文を書く前に構成メモを書く
表記	○ 漢字を使う、ていねいに書く	習った漢字を使ってていねいに書く
表記	○ 段落三文	段落の目安は三文ぐらい
表記	○ 一文一点	読点は1文に1～2点を目安に
表記	○ 常体で書く	した・だった・であるなどで書く練習
表記	○ 誤字一ヶ所以内	一つの作品に誤字は一つまで

## 長文 1.1週 re

1 ある書物がよい書物であるか、そうでないかを判断するために、普通私たちがやっていることは誰でも類似している。自分が比較的得意な項目、自分が体験などを総合してよく考えたこと、あるいは切実に思い患っていること、などについて、その書物がどう書いているかを、拾って読んでみればよい。2 よい書物であれば、きつとそういうことについて、よい記述がしてあるから、大体その箇所、書物の全体を占つてもそれほど見当が外れることはない。

だが、自分の知識にも、体験にも、まったくかわりのない書物に行きあたったときは、どう判断すればよいのだろうか。3 それは、たぶん、書物に含まれている世界によって決められる。優れた書物には、どんな分野のものであっても小さな世界がある。その世界は書き手の持つている世界の縮尺のようなものである。4 この縮尺には書き手が通りすぎてきた「山」や「谷」や、宿泊した「土地」や、出会った人や思い患った痕跡などが、すべて豆粒のように小さくなって籠められている。どんな拡大鏡にかけてもこの「山」や「谷」や「土地」や「人」は目には見えないかもしれない。そう、事実それは見えな

い。見えない世界が含まれているかどうかを、どうやって知ることができるのだろうか。

5 もしひとつの書物を読んで、読み手を引きずり、また休ませ、立ち止まって空想させ、また考え込ませ、要するにここは文字のひと続きのように見えても、実は広場みたいなところだと感じさせるものがあったら、それは小さな世界だと考えてよいのではないか。6 この小さな世界は、知識にも体験にも理念にもかかわりがない。書き手が幾度も反復して立ち止まり、また戻り、また歩き出し、そして思い患った場所なのだ。彼は、そういう小さな世界をつくり出すために、長い年月を棒にふった。7 棒にふるだけの価値があるかどうかかわからずに、どうしようもなく棒にふってしまった。そこには書き手以外の人の影も、隣人もいなかった。また、どういう道もついていなかった。行きつ戻りつしたために、そこだけが踏み固められて広場のようになってしまった。8 実際は広場というようなものではなく、ただの踏み溜りではないほど小さな場所で、そこから先に道がついているわけでもない。たぶん、書き手ひ

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

とりがやつと腰を下ろせるくらいの小さな場所にしかすぎない。9 けれどもそれは世界なのだ。そういう場所に行きあたった読み手は、ひとつひとつの言葉、何行かの文章にわからないところがあつても、書き手をつかまえたことになるのだ。

私は、なぜ文章を書くようになったかを考えてみる。0 心の中に奇怪な観念が横行してどうしようもなく持て余していた少年の晩期のころ、しゃべることがどうしても他者に通じないという感じに悩まされた。この思いは、極端になるばかりであった。この感じは外にもあらわれるようになった。父親は、お前このごろ覇気がなくなつたと言ふようになった。過剰な観念をどう扱ってよいかわからず、しゃべることは、自分をあらわしえないということに思い患つていたので、覇気がなくなつたのは当然であった。われながら青年になりかかるころの素直な言動がないことを認めざるをえなかった。今思えば、「若さ」というものは、まさしくそういうことなのだ。他者にすぐわかるように外に出せる覇気など、どうせ、たいした覇気ではない、と断言できるが、そのとき、そう言いきるだけの自信はなかった。そうして、しゃべることへの不信から、書くことを覚えるようになった。それは同時に読むようになったことを意味している。

私の読書は、出発点で何に向かつて読んだのだろうか。たぶん自分自身を探しに出かけるというモチーフで読みはじめたのである。自分の思い患っていることを代弁してくれていて、しかも、自分の同類のようなものを探しあてたいという願望でいっぱいであった。すると書物の中に、あるときは登場人物として、あるときは書き手として、同類がたくさんいたのである。

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

課題 レンギョウ 1.1週

★内申点、本当の豊かさ

今週は題名だけの課題です。

解説 1.1週

公立の中学では、中学での成績や態度が高校入試の参考になります。大学入試でも、高校での成績を参考に推薦を決めるところが多数あります。本番の試験だけでの一発勝負の方が公平だと考える人もいますし、ふだんこつこつ努力してきた人を評価すべきだと考える人もいます。内申点の是非を自分の生き方に結びつけて考えてみましょう。

解説のつづき 1.1週

第一段落は、身近な実例。「人間は、普段から真面目にこつこつやっておき、いざというときに余裕を持って対処できるように生きていくべきだ。」又は「人間は、ふだんはのんびりやっておき、いざというときに全力を出せるように生きていくべきだ。」

第二段落はその方法。「いざというときに全力を出すために、第一に、ふだんは幅広い教養を身につけるようにしておくことだ。私も、テストのない日はのんびり本を読んだり休んだりして英気を養うようにしている。」

第三段落は第二の方法。「また、社会の仕組みとして、あまりに早めに細かいところで人間を評価しないようにすることだ。エジソンや信長が、普通の小学生と同じように評価されていたら、ただの落ちこぼれになっていた可能性も高い。（伝記実例）」

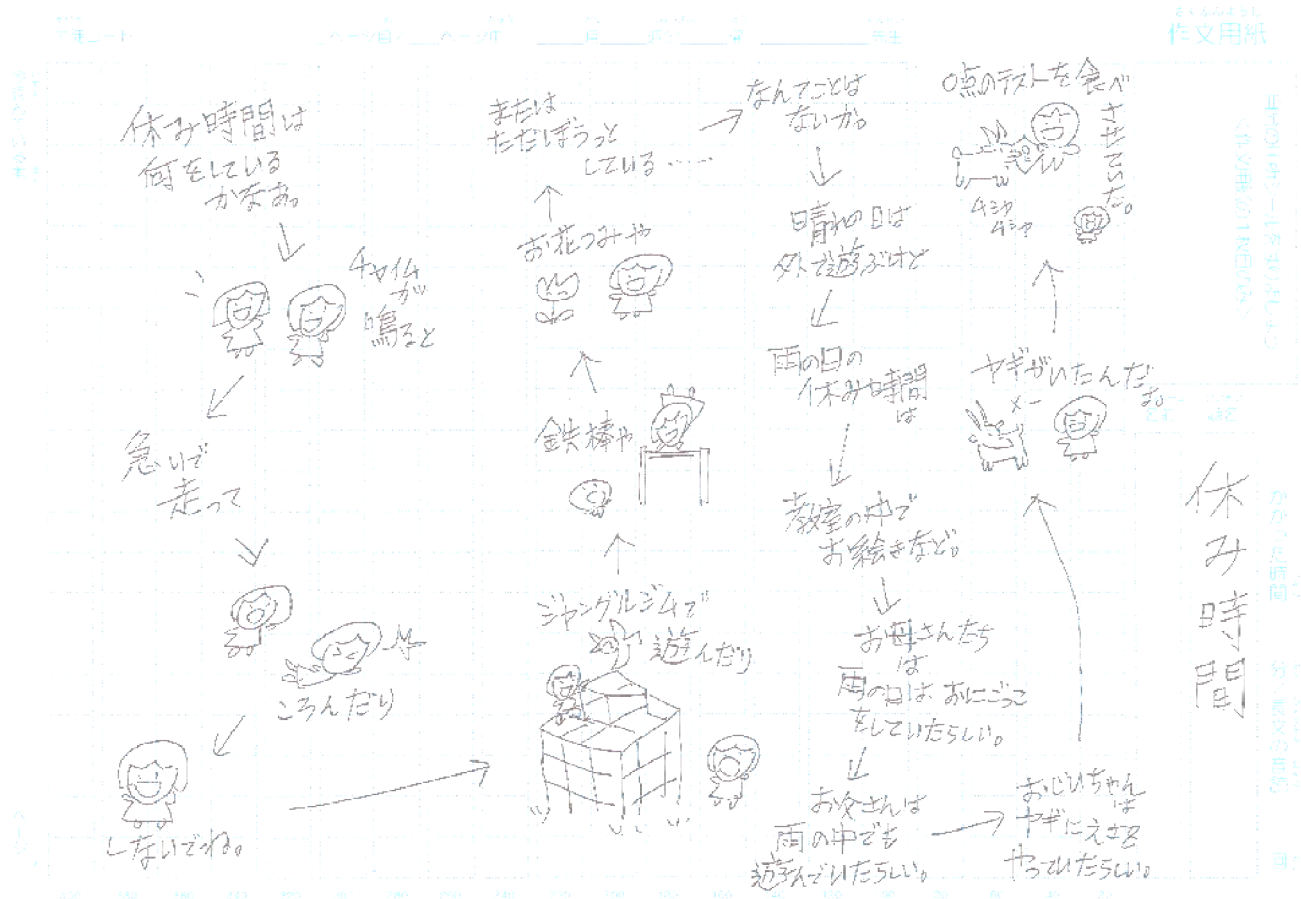
第四段落は反対理解。「確かに、普段からの努力も大切だ。しかし……、『飽きるということも、一つの能力のあらわれである』という言葉がある。普段からこつこつやり過ぎると本番で全力を出せないこともある。だから……。」

解説のつづき 1.1週

構成用紙は、構成図の書き方に慣れるために使います。構成用紙を使わずに、白紙に自由に構成図を書いてもかまいません。

構成用紙を使って構成図を書きます。 	頭の中にあるものをそのまま書くとき。 	構成図で書くとき。 
初めに絵をかきます。（絵はどこにかいてもいいです） 	思いついた短文を書きます。（どこから始めてもいいです） 	思いついたことを矢印でつなげていきます。 
関係なさそうなことでも自由にどんどん書きます。 	枠からはみだしてもかまいません。 	全部うまったらできあがり。 





## 絵のヒント 1.1週（低学年の場合は、ヒントではなく、ただのカットとして見てください）

<p>内申点のよい面：ふだんのまじめさを評価できる</p>	<p>よい面その2：受験科目以外も評価できる</p>	<p>内申点のよくない点：人間は短期間で伸びる</p>	<p>よくない面その2：主要教科の実力が最も公平</p>
-------------------------------	----------------------------	-----------------------------	------------------------------

長文 1.2週 re

**1** 農業は、きわめて恣意的な営みである。土を耕す仕事は自然と調和したエコロジカルな行為と一般には思われていたようだが決してそうではない。恣意的、といって曖昧なら、人間が自然を自分の都合のよい方向にねじ曲げる行為、といったらい過ぎか。

**2** だいたい、野菜、という概念からして人工的なものである。人は野草や山菜を採集する労苦と非効率を恨んで、採ってきた植物を住むところの近くに置いて管理しようと試みた。種を取って播き、みずからの意志によって自然を手なづけようとさえした。

**3** 人間の管理下に置かれたもののうち、栽培されることに甘んじた植物もあったし、断固としてそれを拒否し、野生の状態でなければ生育しないことを死をもつて示した種もあったろう。

食用になる野草山菜のうち、人の管理下での植栽が可能なものが「ベジタブル」と呼ばれる。**4** 生長・増殖することが可能、という意味である。

そればかりではない。品種の「改良」という名のもとに、人間は植物の姿かたちさえも自分たちの望む通りに変えてきた。根が食べたいと思えば、根を太くする。茎が固いと思えば、柔らかくする。**5** たとえばレタスとかキャベツとかいった、丸く結球する野菜を考えてみよう。

これらの植物は、芽が出てからしばらくのようすを見ていればわかるが、最初はごくふつうの、それぞれの葉が外側に反りながら上に伸びていくかたちの青菜である。**6** それが、ある時点から、しだいに外側の葉が内側の葉を包むように巻きはじめの。この性質は、人間がつくったものである。

葉が丸く内側に巻きはじめるのは、過剰な栄養のために過度に増えた葉がこみあって伸びる場所を失うからだ。**7** もちろん生体が想定し得る以上の栄養を与えることができるのは人間だけであり、そうして得られた結果——つまり、結球することによって内部は日光を遮断されて白く柔らかくなり、同時にひとつの固体の摂食可能な部分の体積が飛躍的に増える——を享受するのもまた人間なの

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

だ。**8** 私は、野菜のために土を耕しながら、ときどきそんなことを考えた。「文化」という言葉の語源は「耕す」という意味だと教えられ、そうであるとすれば土を耕す農業こそはまさしく文化的な営みだと納得するが、**9** しかしそれにしたところで、文化というのは人間が手をつけれられないような荒々しい自然をなんとか馴化して管理下に置こうとする試みなのだ、と種明かしをすれば、それほどたいしたことやしていないのはすぐにわかる。**10** 人は自然界にある無限の音から人の耳に美しいと感じられる楽音だけを取り出して音楽をつくり自然界の無限の風景のうち気に入った部分だけを抽出して絵画に構成する。農耕も含めて、そうした「文化」的な営みの中においてだけ、人は自然を自分たちのコントロール下に置いたような気分になるのである。

私たちの農作業は、「文化」からはほど遠いところにあった。九二年は、前述したように乾燥した暑い夏だった。

九三年は、一転して雨ばかり降り続く寒い夏で、コメが大凶作に見舞われたことは記憶に新しい。私たちの畑でもブドウには病害が発生したし、トマトは降り続く雨にたたられてひどい減収、ジャガイモは掘り返す前に半分が土の中で腐った。

そして九四年はまたまた予想を裏切る酷暑と早魃のシーズンで、ブドウは辛くも枯死をまぬがれてなんとか収穫にまで至ったもののブルーベリーは熟しつつある実をつけたまま立ち枯れ、トウモロコシも皮を剥くと乾からびた実があらわれた。そのため連日水やりに追われたが、地熱があまりにも高くそれこそ焼け石に水であった。トマトもピーマンも水不足で小さな表面の乾いた悲しい実しか実らせることができなかったし、秋になってようやく持ち直したと思ったら台風風の風で倒された。

まったく、自然を手なずけるどころか、自然の大きな力に翻弄されるばかりである。

もちろん、その理由の大きな部分が私たちの技術や予測の未熟さ設備や投資の不足にあることは明白だが、しかし必要なソフトやハ

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34



## 長文 1.2週 reのつづき

ードをすべて兼ね備えているはずの周辺のプロの農家も結局はほとんど同じような被害に苦しんでいることを考えると、そもそも農業というのは、人間が自然に働きかけかなりの程度それを飼ひ慣らしたように見えて、実際には単に大きな自然界のほんの少々の「おあまり」をいただくくらいのことしかできないのだ、ということがわかってくる。

畑仕事をはじめた最初の年には、抜いても抜いても生えてくる雑草と格闘しているうちに、「いったい、俺はなんでこんなことをしているのだろう」と自問することがしばしばあった。「こんな無駄なことにかかわっている時間に、もっとほかにやるべきことがあるのではないのか？」そう思ってイライラしたこともある。

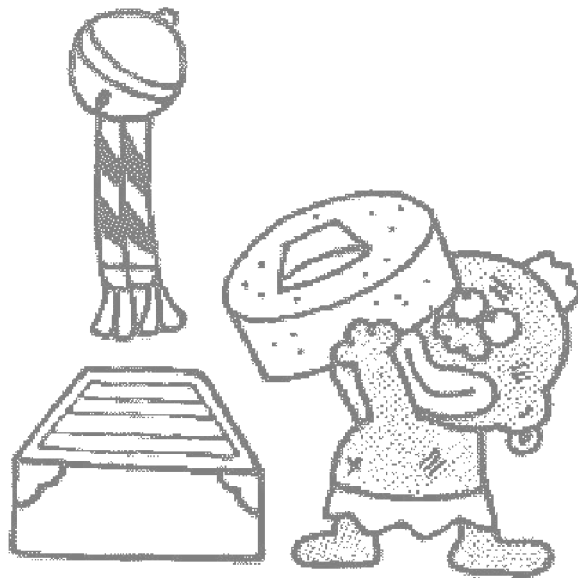
しかし、そんな過渡期の思いも、二年めに入るとしだいに消えていった。

畑仕事は、いくら人間が焦っても、できないものはできない。われわれの望むもののうち、自然の合意を得られた分だけを、ゆるゆるとすすめることしかできないのである。

(玉村豊男「種まく人」より)



99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67



課題 レンギョウ 1.2週

★農業は、きわめて恣意的な営みで（感）

今週は感想文の課題です。

解説 1.2週

内容：農業は自然界にある植物を人間の管理下におこうとする営みである。しかし、人間はまだ自然を十分にコントロールできていない。自然の合意を得られた分をいただくぐらいしかできないのである。

解説：登山家も初心者のはじめは、「今度はエベレストを征服するぞ」などと言うそうですが、だんだん年期を積んでくると、征服するなどというおこがましいことは言えなくなるそうです。人間が自然を加工して住みよい世界を作ってきたことは確かですが、まだ自然には人間の知恵を大きく超えたものがあります。自然に対しては、もっと謙虚に、そして気長に取り組んでいくことが大切なのでしょう。最近のバイオテクノロジーの話などと関連させて考えることもできそうです。

解説のつづき 1.2週

第一段落は要約。続けて生き方の主題の意見。「私は自然に対して謙虚な気持ちを忘れずに生きていきたい。」

第二段落は、方法1と体験実例。「そのためには、第一に、自然の恐ろしさを認識することである。」体験実例は、人から聞いた話、テレビで見た話などでもいいです。

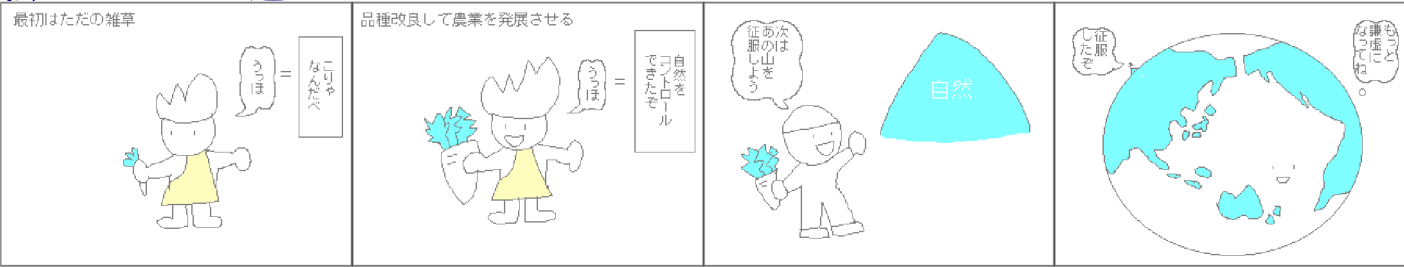
植物や動物を育てたことのある人は、生き物の不思議な力に驚いたことがあるでしょう。人間ができるのは、水をやりたり餌をやったりすることだけで、人間の科学の力ではまだ光合成の仕組みの真似をすることさえもできません。

第三段落は、方法2と伝記実例。「そのためには、第二に、幼いころからもっと自然に親しめるような機会をふやしていくことである。伝記によると、ファーブルは幼いころから虫が好きで、時間が経つのも忘れ、草むらにしゃがんで虫の観察をしていたらしい。ファーブルのように幼いころから自然に親しみ、自然を知ることができれば自然に対して謙虚な気持ちを持ち続けることができるのではないだろうか。」

第四段落は、反対理解と名言の引用。「確かに、ときには人間が自然を管理することも必要だ。しかし、「寒さにふるえた者ほど、太陽の暖かさを感じる。」という名言もあるように、私は自然に対する謙虚な気持ちを忘れずに生きていきたい。」生き方という言葉は括弧書きで書いてもいいです。例えば、「自然に対して謙虚な気持ちを持ち続けたい（生き方）」など。

絵のヒント 1.2週

(低学年の場合は、ヒントではなく、ただのカットとして見てください)



## 長文 1.3週 re

1 われわれ自身は必ずしも意識していないかも知れないが、例えば「スママセン」という表現は不思議だと感じられることがある。この表現は英語で言えば「Thank you」と「I am sorry」といういずれの表現の使われる場合にも用いられるが、2 一方は「お礼」、他方は「お詫び」の表現であり、そのように一見相反するとも思えるものが同じことばで表されるのは不可解だというわけである。しかし、われわれ自身がこれらの表現を使う時の気持を少し意識的に内省してみればすぐ分かる通り、3 相手から何か好意あることをしてもらったこととは有難い（Thank you）と同時に、負担をかけたという意味で申し訳ない（I am sorry）ことであり、こちらからもそれに応える何かをお返しするまでは事はすまないし、自分の気持ちもすまない——ということ、日本語にはそれなりの論理が背後にあるわけである。

4 あるいは、このような例はどうであろうか。英語では、「I am cold」「You are cold」「He is cold」は、どれも同じように普通の自然な表現である。ところが日本語だと、「ボクハ寒イ」はよいが、「君ハ寒イ」、「彼ハ寒イ」というのは不自然に聞こえる。5 一見、日本語の方は筋が通っていないように思えるが、それなりの論理は背後にある。つまり、寒いと感じるのは本人の感覚であり、それを本当の意味で体験できるのはその本人だけである。したがって、自分の寒いのは自分で分かるから良いが、同じことは他人についてはできないはず、というわけである。6 「君（彼）ハ寒イ」などという表現を聞くと、何となく差し出がましいことを言っているという印象を受けるのもそのためである。（本人が寒いということは、本人以外にはその内的な感覚が外からも知覚できるような形で現れて初めて分かることである。7 「君（彼）ハ寒ガッテイル」ならば不自然でなくなるのは、そのためである。）

この種の例は言語のいろいろな面で、またいろいろな抽象度で、見出し議論することが可能である。そこで見出される特徴も、この言語特有のものから、どの言語にも普遍的なものに至るまで、さまざまな段階のものがあろう。8 そして、また、それぞれの特徴の持っている文化的な意味合いもさまざまであろう。それは、言語を使う人間が一方では自分なりの創造をすることのできる文化的存在であり、同時に、他方では生物学的存在として生理的・

心理的に（例えば、発声・調音器官の構造の類似、記憶力の限界など）共通の制約を有しているからである。

9 しかし、いずれにせよ、一つの言語を習得して身につけるということは、その言語圏の文化の価値体系を身につけ、何をどのように捉えるかに關して一つの枠組みを与えられるということである。0 （その意味で、一つの言語を習得するということは一つの「イデオロギー」を身につけることなのである。）そこで身につけられる価値体系やものの捉え方の枠組みは、決してそこから抜け出せないといった性格のものではない。しかし、われわれがとりわけ日常的なレベルで、それらを「自然」なものとして受け入れている限りにおいて、自らの身につけている言語によって、ある一つの方向づけをされているのではないか。しかも、われわれ自身はそれに必ずしも気づいていないのではないか。もしそうだとすると、この点における言語の働きは、人間という存在にとつて「無意識」の働きにもある程度類比できるのではないか。いや、むしろ、「無意識」の方がいろいろな意味でその働きを言語に負っているのではないか。こういった反省にまで進んでいくことになるのである。

（池上嘉彦「記号論への招待」）

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

課題 レンギョウ 1.3週

★われわれ自身は必ずしも意識して（感）

今週は感想文の課題です。

解説 1.3週

内容：ひとつの言語を習得して身につけるということは、その言語圏の文化の価値体系を身につけることである。しかし、われわれはそれに必ずしも気づいていない。

解説：「すみません」という言葉は、よく使われます。「ありがとう」と「ごめんなさい」の二つのニュアンスが合体した表現というのはどこでも使えて便利ですね。「これ、やっというてあげたよ」「あ、すいません」。「このプレゼント、君にあげよう」「あ、すいません」。「ところで、煙草、すうかい」「あ、すいません」「どっちだ」なんてね。

こういう「すみません」というような言葉を使って暮らしていると、だんだん、周りの人に迷惑をかけないように謙虚に控えめに生きていくのが美德だという日本的な価値観を知らず知らずに身につけていくのかもしれない。似たような表現に、「これ、つまらないものですが…」というのがありますね。

「どうも、どうも。いやあ、ちょっとそこまで」なども日本的な表現で、この言葉を使っていると、あいまいにお茶を濁しておくのが立派な大人で、白黒をはっきりさせるのは野暮だという気になってくるでしょう。

自分の使っている言葉がどういう価値観に基づいているかということはなかなか自覚できませんが、世界には異なる言語＝価値観を持っている人がいるのだということを折りに触れて考えてみるのが大切なのでしょう。

解説のつづき 1.3週

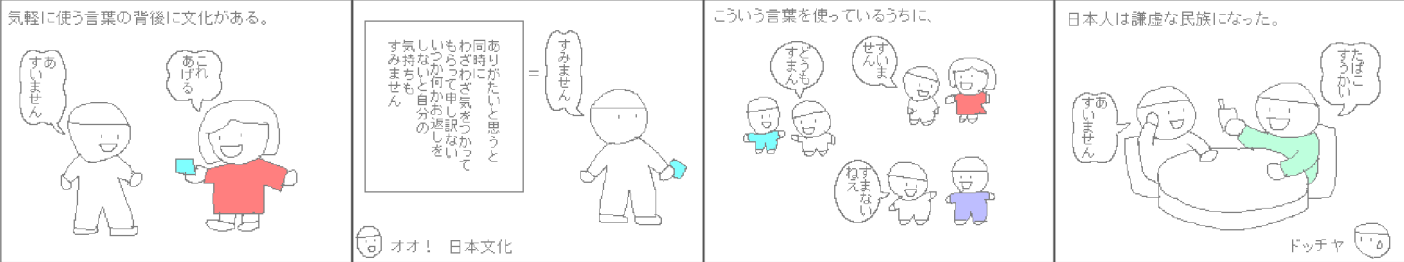
第一段落は、要約と意見。「言葉の背後には、その言語圏の文化がある。日本語を使うとき、私たちは自然と日本的な文化を通して物事を見ることになる。そのことを深く自覚していく必要がある。例えば、日本には「『これはつまらないものですが』』という言い方がある。謙虚なことはいいことだが、もっと自分に自信を持った生き方をしていきたい。」

第二段落は、そのための方法。「そのためには、第一に、失敗や批判を恐れないことだ。謙虚さの背後には、批判を恐れる気持ちがある。何事に対しても、私は全力でがんばったと言えるようにしていきたい。」

第三段落は、方法2。「また、もう一つには、積極的に海外の人と交流する中で、日本文化の狭い枠にとらわれない考え方を身につけていくことだ。伝記によれば、福沢諭吉は、学校の中での生徒の先生に対する形式ばったあいさつを省略するなど、合理的な考えを持っていた。これも書物を通して外国の物の見方に触れたからであろう。」

第四段落は、反対理解と意見。「確かに、それぞれの文化の個性を守ることは大事だ。しかし、それが無自覚に行われているのであってはならない。『自分が考えるとおりに生きなければならない。そうでないと、ついには自分が生きたとおりに考えるようになってしまう』という言葉がある。日本の文化の中で生きていくと、自然に日本的な考えが当たり前だと思ってしまう。もっと大きな視野で自分を見直すことが必要である。」

絵のヒント 1.3週（低学年の場合は、ヒントではなく、ただのカットとして見てください）



長文 1.4週 re

なにぶん絵本のことで、生々しい絵の印象も手伝ったにちがいないが、「安寿と厨子王」の話は私には暴力にも似た一撃であった。グレアム・グリーンが『失われた幼年時代』で言っているように、「本と

いうものがわれわれの人生に深い感化を及ぼすのは、おそらく幼年時代だけである。それ以後は、感心したり、面白がったり、これまでの見方を修正したりすることはあっても、多くはすでに考えていたことを本で確認するにとどまる。恋をしていると、自分の顔かたちが実物

以上によく見えるような気がするのと同じである。」

私が鴎外の『山椒大夫』を読んだのは、大人になってからであった。そして今度また久しぶりに再読したが、結末のところを見て、そうかと思った。あの母親は、可愛いさかりの娘と息子をさらわれた哀しみに夜も昼も泣いて暮らすうちに、とうとう目がつぶれてしまった、というくだりがあるような気がしていたからである。むしろ、作者はそんなことは書いていなかった。書く必要もなかったにちがいない。私はたぶん昔の絵本でそう読んだのか、でなければ自分でそう考えたのであろう。いずれにしても、私の心には絵本のイメージのほう

が生きていたのである。

私が鴎外の結末でいい加減に読み過ぎしていた箇所は、もう一つあった。作者はこう書いている。

「女は雀でない、大きいものが粟をあらしに來たのを知った。そしていつもの詞を唱えやめて、見えぬ目でじつと前を見た。そのとき干した貝が水にほとびるように、両方の目に潤いが出た。女は目が開いた。

『厨子王』という叫びが女の口から出た。二人はびったり抱き合っ

た。」

それは厨子王が姉の形見に肌身離さず持っていた守り本尊の力であるという。そこが、ほとんど私の印象にはなかった。絵本のほうはどうであったかは、もう覚えていない。子供心にも、この最後の奇蹟はいくぶん付けたりのように思われたかもしれない。今の私には、親の一念、子の一念とはそれほどものかもしれないと思う気持ちもある一方で、不幸な女の盲目という書き方に、何か古い物語

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

の慈悲のようなものを感じる。ハッピーエンドがつまらぬというのはなく、目が明くことのほうが残酷な場合も人生にはあるだろうからである。

作者鴎外は、この作品の発表（大正四年）と同時に『歴史其儘と歴史離れ』という文章を書き、自ら詳しい解題を行っている。そして、「山椒大夫のような伝説は、書いて行く途中で、想像が道草を食って迷子にならぬ位の程度に筋が立っているというだけで、わたくしの辿つて行く糸には人を縛る強さはない。わたくしは伝説そのものをもあまり精しく探らずに、夢のような物語を夢のように思い浮かべて見た」と言っている。

「夢のような物語を夢のように」というその夢は、ある特定の個人が見る夢というより、われわれ日本人の誰しもが民族の血の中に受け継いできた古い歴史の余映のようなものである。夏目漱石も短編集『夢十夜』（明治四十一年）で、われわれの現在を支配する過去の恐ろしい姿を、不条理なイメージの断片を突きつけるようにして、あばいて見せた。伝説のみならず、お伽噺や民話や怪談のたぐいはいつの世にも子供の心をとらえるのは、子供自身の血の中に、自分が生まれる何代も前の記憶を呼び起こそうとする本能が潜んでいるからだとも考える他はない。

（阿部昭『短編小説礼讃』）

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

---

課題 レンギョウ 1.4週 ★清書（せいしょ）  
4週目は清書です。



## 長文 2.1週 re

「一番目の長文が課題の長文です。」

1どこかへ旅行がしてみたくなる。しかし別にどこというきまっ  
あてがない。そういう時に旅行案内記の類をあけて見ると、あるいは  
海浜、あるいは山間の湖水、あるいは温泉といったように、行くべき  
所がさまざま有りすぎるほどある。2そこでまずかりに温泉なら温泉  
ときめて、温泉の部を少し詳しく見て行くと、各温泉の水質や効能、  
周囲の形勝名所旧跡などのだいたいがざっとわかる。しかしもう少し  
詳しく具体的な事が知りたくなって、今度は温泉専門の案内書を  
探し出して読んでみる。3そうするとまずぼんやりとおおよその見当  
がついて来るが、いくら詳細な案内記を丁寧に読んでみたところで、  
結局ほんとうのところは自分で行つて見なければわかるはずはない。  
もしもそれがわかるようならば、うちで書物だけ読んでいればわざわざ  
さ出かける必要はないと言つてもいい。4次には念のためにいろいろ  
の人の話を聞いてみても、人によつてかなり言う事がちがつていて、  
だれのオーソリテイを信じていいかわからなくなつてしまふ。それで  
さんざんに調べた最後にはつまりいいかげんに、賽でも投げると同じ  
ような偶然な機縁によつて目的の地をどうにかきめるほかはない。  
5こういうやり方は言わばアカデミックなオーソドックスなやり方  
であると言われる。これは多くの人々にとつて最も安全な方法であつ  
て、こうすればめったに大きな失望やとんでもない違算を生ずる心配  
が少ない。6そして主要な名所旧跡をうっかり見落とす気づかいも  
ない。

しかしこれとちがつたやり方でもないではない。たとえば旅行がした  
くなると同時に最初から賽をふつて行く所をきめてしまふ。あるいは  
偶然に読んだ詩編か小説かの中である感興に打たれたような場所に決  
めてしまふ。7そして案内記などにはてんでかまわないで飛び出し  
て行く。そして自分の足と目で自由に氣に向くままに歩き回り見て  
回る。この方法はとかくいろいろな失策や困難をひき起こしやすい。  
またいわゆる名所旧跡などのすぐ前を通りながら知らずに見のがして  
しまつたりするのは有りがちな事である。8これは危険の多いヘテロ  
ドックスのやり方である。これはうっかり一般の人にすすめる事ので  
きかねるやり方である。

しかし前の安全な方法にも短所はある。読んだ案内書や聞いた人

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

の話が、いつまでも頭の中に巢をくつていて、それが自分の目を隠し  
耳をおおう。9それがためにせつかくわざわざ出かけて来た自分自身  
は言わば行李の中にでも押しこめられたような形になり、結局案内記  
や話した人が湯にはいったり見物したり享樂したりすると同じような  
事になる、こういうふうになりたがるおそれがある。0もちろんこれ  
は案内書や教えた人の罪ではない。

しかしそれでも結構であるという人がずいぶんある。そういう人は  
もちろんそれでよい。

しかしそれではわざわざ出て来たかいた考えないともある。曲  
がりなりにでも自分の目で見て自分の足で踏んで、その見る景色踏む  
大地と自分とが直接にびったり触れ合う時にのみ感じ得られる鋭い感  
覚を味わわなければなんにもならないという人がある。こういう人は  
とかく案内書や人の話を無視し、あるいはわざと避けたがる。便利  
と安全を買うために自分を売る事を恐れるからである。こういう変わ  
り者はどうかすると万人の見るものを見落としがちである代わりに、  
いかなる案内記にもかいてないいいものを掘り出す機会がある。

（寺田寅彦「案内者」より）

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

**1** 現代はアイデンティティ不定の時代といわれている。私はなにものか。私は何をして生きていけばよいのか。どうすれば自分らしさを発見できるのか。これらの問いは青年期につきものだが、最近では、青年期に限らず、およそライフステージのどこにおいても、このような問いにつきまといることが多い。

**2** 近代社会は、前時代の共同性を解体させ、一人の個人がある具体的な共同体に属することの内的な意味を希薄化させた。それが、私たちのアイデンティティ不定の大きな要因として関係している。**3** それは同時に、私たちの社会において「大人である」とか「大人になる」とかということが、何を指すのかがはっきりしないことをも意味する。

なぜならば、かつては、大人になることは、端的に、個人が自分の属すべき共同体の一員としての資格を得ることを意味していたからである。**4** 共同体があるひとつの精神のもとに統一性を保っていたら、大人であることの意味はおのずから決まってきた。したがって大人になることは、その共同体の核をなしている精神を心身両面において理解し、それを自分が生きていくための基本の型として承認することの意味していた。

**5** よく知られているように、近代以前の社会には、それぞれの社会の要請に見合った何らかの通過儀礼が存在した。子どもと大人はこの儀式によってはっきりと分けられていた。**6** たとえば、わが国の武家社会における元服の儀式は、それを最もよく象徴している。一定の年齢になると、男子は幼名を廃し烏帽子名をつけ、服を改めて、髪を結いなおしたりさかやきを剃ったりした。

**7** ところが近代は、子どもから大人への変化期からこの単純な境目を取り払い、代わりに「教育課程」という、長い射程をもったシステムをあてがうことにした。いうまでもなく、学校制度がその機能を果たすことになったのである。

**8** 「教育課程」は、節目のはっきりしないたいへん間延びしたプロセスである。それは、人間はだんだんと段階的に成長していつて大人になるものだというイメージを私たちのなかに知らず知らずのうちに植えつける。**9** 近代の教育制度は、自分がどこで大人になったのかという自覚を曖昧なものにさせる効果を持っていたのである。

一方では、いま述べた認識と一見矛盾する次のようなこともいわれている。

**0** 近代以前には、子ども期と呼べるような時期は存在せず、子どもはみな小さな大人であった。幼児期をすぎると、ごく早い時期から子どもは大人の集団に仲間入りして、かれらの話や行動のなかから見よう見まねで大人社会の規範やそのありさまを学び、明瞭に問題化されることとひそやかに語られることとの区別などを身につけるようになっていった。(中略)

ところが近代になって、資本主義的生産が飛躍的な発展を遂げるに従い、一人の生産者が複数の消費者を養えるようになると、「家族」が、一般世間から明瞭な輪郭をもつて成立するようになった。

この、一般世間からの家族の明瞭な自立が、年少の人々を内部に囲い込み、そこに子ども期と呼べるような独立した時期を誕生させた。人間の成長・成熟にとって、家族生活の重要性が浮かび上がるようになった。(中略)

それまでは、子どもは生むにまかせ、大した配慮もなく育つにまかせていた。子どもは、家族の内側と外側のはっきりしない境界線を、早くから行き来していた。そして、親から身体的な意味で自立できるようにするべく早い年齢段階から生産にかり出され、大人の世界に参加させられていた。

ところが、ある時期から、人々は、子どもをまさに子どもとして「大切に」あつかうようになった(あつかいが実質的に少なくなつたのかどうかという判断の尺度にはならない)。フリッツ・アリエスのいう「十七世紀までは子どもは小さな大人にすぎなかった。子ども期は近代になって発見されたのだ」という有名なことばはそういう意味である。

したがって、両方の認識は矛盾するのではなく、同じ一つのことを異なる二つの側面から観察したものと考えるべきだ。要するに、子どもと大人との間に単純に荒々しく引かれていた境界線が取り払われ、それまでは半ばどうでもいいものとして無造作に考えられていた子どもが、もつと細心な視線を注がなければならぬ存在として、大人たちの意識のなかにクローズアップされてきたのである。そしてその結果、子ども期は、いくつかの段階を抱え持ちつつ、次第に大人になってゆく、「過程的な」存在とみなされるに至つたのである。

(小浜 逸郎「大人への条件」による)

99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67

32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01 00

課題 レンギョウ 2.1週

★現代はアイデンティティ不定の（感）

今週は感想文の課題です。

解説 2.1週

内容：現代はアイデンティティ不定の時代である。それは第一に、近代以前は大人になることが共同体の一員に属することを意味し、元服のような単純な境目があったが、近代は大人になる過程を学校教育という長いプロセスに変えたからである。また第二に、近代以前は、子供期というものとは存在せず、子供はそのまま社会の集団に参加していたが、近代以降は豊かな生産力を背景にした家庭の自立に伴い、子供が社会から隔離されて家庭内で育てられるようになったからである。

解説：最近の成人式は、式の途中でお喋りをするわ、携帯電話をするわで、主催者側も大変なようです。成人式と言っても、大学生のうちはまだ親のすねをかじっている身ですから、自分が一人の自立した人間として社会に参加していると自覚できるのは、就職をして給料をもらったり、結婚して子供が産まれたりしてからになるのでしょうか。しかし、最近では、定職を持たない人もいますし、子供が産まれても育児の自覚のない人も増えてきたようです。

親や家庭の庇護から離れることはだれでも不安を持つものです。しかし、近代以前は、「よし、今日からは男一匹（もちろん女の人も）、誰にも頼らずに生きていくぞ」という決心をする機会が社会の中にありました。

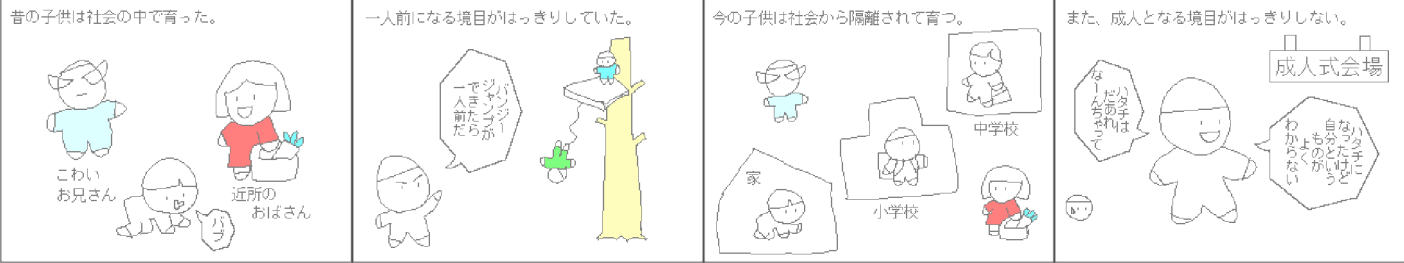
アイデンティティ不定の時代にアイデンティティを持って生きていくためにはどうしたらよいか、ということをも主題にして、複数の方法を考えていきましょう。第一の方法は自分の心構えなどから、第二の方法は社会や教育のあり方などからと構成に広がりを持たせるように考えてみましょう。

解説のつづき 2.1週

意見は、いろいろに考えられますが、「社会の中で自分の役割を果たすことによってアイデンティティを持てるような人間になろう」ということで考えると書きやすいでしょう。もっと噛みくだいて言うと、「いつまでも子供でいずに、早く大人になろう」ということです。

- 第一段落は、要約と意見。
- 第二段落は、方法と体験実例。「そのためには、実際の社会を体験することだ。私も、この前、ボランティア活動を行ったが、自分の役割がみんなから期待されているということは、貴重な体験だった。」
- 第三段落は、方法2と伝記実例。「また、社会も、いつまでも若者を子供扱いせず、重要な役割にどんどんつけていくことだ。エジソンは、子供のころから列車の中で新聞を作って売る仕事をするなど、自立心が旺盛だった。それも、そういう自立を促す社会の雰囲気があったからだろう。」
- 第四段落は、反対理解と名言の引用と意見。「確かに、世の中が複雑になると、子供という期間が長くなる傾向はある。しかし、『トランプが生きているのは、それが実際のプレーに使われているときである』という言葉もある。実際の社会で役立つ人間になるようにがんばりたい。」

絵のヒント 2.1週（低学年の場合は、ヒントではなく、ただのカットとして見てください）





## 長文 2.2週 re

**1** 私の英語力はほとんど中学三年間の教育に依拠している。高校時代に覚えた難しい単語は記憶の彼方へ霧散してしまっただけで、大学時代の英語教育はなきに等しかった。大学にはLL教室があったけれど、テレビモニターを相手におうむ返しに発声するという行為の単純さと滑稽さには耐え難いものを感じた。**2** 現代小説を読むリーディングの授業は他力本願で何も身につかなかった。一番ひどかったのがアメリカ人講師による会話のクラスだ。これにはどうしてもなじむことができなかった。その主な理由は、講師の「笑顔」にあった。**3** 金髪の彼は、授業の間中、表情豊かに微笑しつつ頻繁に学生たちに語りかけていた。たいてい私はうつむいて、机の下で爪をいじったりしながらそれを聞いていた。それがいけなかった。**4** 視線を落として指先のあたりを見つめるのは「意識を集中して何かを聞く」ときの私の定型ポーズにすぎないのに、彼にかかると、それは授業に対する「不満の表明」とみなされる。しよっちゅう机の脇に来ては、「何か問題がありますか?」「具合でも悪いのですか?」と尋ねられてうつとうしいことこの上ない。**5** 私は無表情に首を振る。「別に、何もありません」心の中では思っていた。おかしくもないのにあなたみたいに笑っちゃいられないわよ。馬鹿じゃないんだから……。そうこうする間に私の英語力は息絶えた。**6** それから十年以上が経った昨夏、女子大生の語学研修に同行してアイオワ州のある私大へ行った。私自身は英語のレッスンに参加したわけではなかったけれども、ひと月近く滞在するうちに、あちらの教授とかなり緊密な付き合いをすることになった。**7** なにしる、朝昼晩の食事が一緒である。毎日、レッスンの前後にあちこちへ案内され、週末には自宅へ招待される。それはもう逃げ場もなく英語攻めというところもあり、苦しさ半分有り難さ半分といった日々。苦しさの方は、言葉が頭の中に渦巻くばかりで口から発射されないことだ。**8** だいたいすれ違ふたばに見知らぬ人と挨拶を交わすという習慣からして私にはつらい。につこり笑って、「ハロー」というだけのことにどつと疲れてしまう。

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

有り難さの方は彼らのあふれるホスピタリティに触れたことだ。**9** アルバイトの学生から役付きの偉い教授までが、私の日常の細やかな部分に気を遣ってくれる。立場が逆だったら、こうまでは出来ない。「笑顔」である。彼らは揃いも揃ってにこやかな人々だった。いつ会ってもギゲン良さそうに微笑んでいる。**10** ほとんど朝から晩まで笑っているのかと思うほどだ。もしかすると表情筋が笑顔に固定されているのかも知れないとさえ思った。陽気な奴らなんだ、きつと。笑顔の民族なんだ。ある時私は見てしまったのだ。今までにこやかに笑顔を振りまいていた教授が、一人になったとたん、考え深げな、どことなく徒労感の漂う表情に戻るのを。彼はふと、まだ傍らに私がいるのに気づいたけれども、再び同じテンションの笑顔に持っていくまでに驚くほど時間がかかった。その時、彼らの笑顔が意識的な努力の賜物であることを私は悟った。彼らは実に意識的な人々だった。明快な価値観を持ち、一瞬一瞬を選択し、行動に移す。笑うべきだと思いうから笑うということだ。たとえ一番気が抜けるはずの家庭でさえ、意志の力で支えていかなければあつという間に瓦解するという厳しい認識が、日常の些細な行為の背後にも痛いほどに感じられる。現実には厳しく、それを乗り越えるためには強靱な意志力と行動が必要なのだ。その厳しい現実の一つがきつと理解不可能な他者の存在なのだろう。ひと月の間に、さまざまな場所でさまざまなアメリカ人とすれ違ふうちに、私は一つの妄想を抱くようになった。「向こうから知らない人が歩いてくる。言葉は通じそうにない。何か誤解されたらナイフを突き付けられるかもしれない。ピストルだったら即死だ」そのような心理的風土のもとでなら、過剰だろうがなんだろうが誤解の余地もないほどに微笑んで敵意のないことを相手に示そうとするだろう。相手もそうするだろう。摩擦を起こさず、安心してくらせる市民社会の、それがルールになるだろう。ここにいたって、その昔、苦手だった英会話のクラスで何が起こ

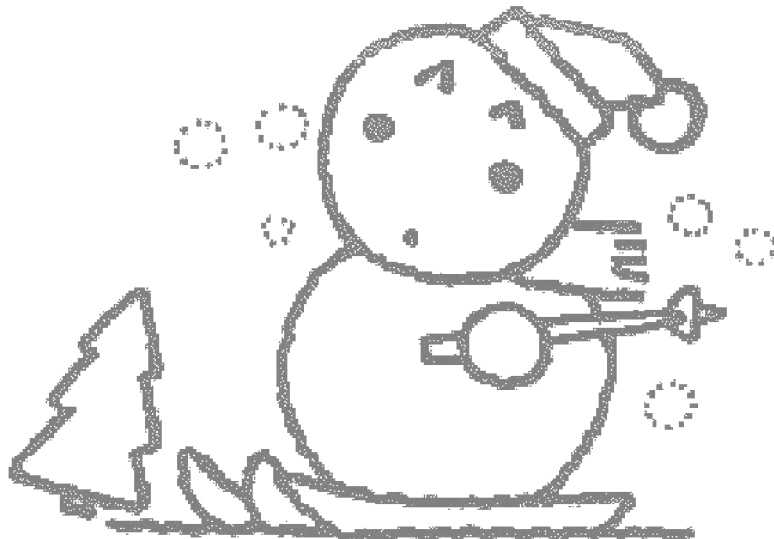
66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

つていたのか、私はようやく理解した気がするのだ。こういう国から来た人ならば、うつむくばかりでコミュニケーションの努力を怠った私には苛立ったはずだ。今思えば、彼もまた強靱な意志力によって精一杯私たちに微笑みかけていた。こちらが無表情だった分、彼の微笑みは過剰になるのかもしれない。英語表現の基礎は語彙でも構文でもなく、伝えようとする意志、微笑むその姿勢だと教えていたのかもしれない。

アメリカ人は、あんなに毎日一生懸命に生きていて疲れないのだろうか。



99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67



課題 レンギョウ 2.2週

★私の英語力はほとんど（感）

今週は感想文の課題です。

解説 2.2週

内容：大学生のときの英語の授業で、アメリカ人講師の笑顔に違和感を持った。後年アメリカに行き、彼らの笑顔が意識的なものだを知った。笑顔は、異質な人が共存する社会でのコミュニケーションのルールなのだった。

解説：笑顔のほかに、挨拶や言葉づかいや服装などもコミュニケーションのルールと言えそうです。中3の人の中には、受験のときの面接の仕方などを練習した人もいると思いますが、知らない人と初めて話すような場では、互いに誤解を招かないようなルールが必要です。面接の会場に、セーターにサンダルばきであくびをしながら入って「ん？ なんでも聞いてちょうだい」などと言う人はいません。大事なの中身ですが、入れ物がそれなりにしっかりしていないと、中身まで見てもらえません。

意見は、「ルールを大切に」ということで考えることもできますが、反対に「無理をせずありのままの自分で」ということで考えてもいいでしょう。

解説のつづき 2.2週

第一段落は要約のあと、「笑顔を大切に生きよう」又は、「人にどう思われるかは気にせずに自分らしく生きよう」

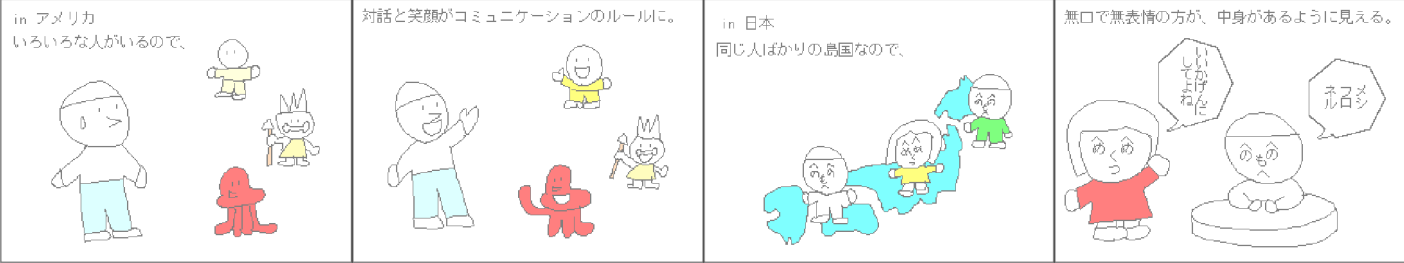
第二段落は、その方法と体験実例。「まず大事なことは、相手に対する思いやりの気持ちを持つことだ。私の母は、いつもにこにこ笑っているの、私も笑顔が自然に身についた。」

第三段落は、方法2と伝記実例。「第二に、小さいころからできるだけ多くの人とコミュニケーションをとることだ。徳川家康は、小さいころから人質になって苦労をしたので、人情の機微がよくわかったと言われている（伝記）。」

第四段落は、反対理解と名言の引用。「確かに、ほかの人にどう思われるかを気にするよりも自分らしく生きた方がいいという考えもわかる。しかし、「上手なプレーをしたときよりも、悪いプレーをしたときの態度が大切である」という言葉がある。調子の悪いときに笑顔になれるかどうかはその人の器を決めるだろう。」

絵のヒント 2.2週

(低学年の場合は、ヒントではなく、ただのカットとして見てください)





## 長文 2.3週 re

**1**大相撲をはじめて見にいったとき、びっくりしたことがある。それは、取り組み中、観客席が四六時中ざわわして、呼び出しから仕切り、立ち会い、組み合い、そして勝負までのしだいに盛り上がり、つていくはずの緊迫感がぜんぜんないということだ。**2**それどころか、そもそも立ち会いの瞬間も注意をこらしていないと、すぐ見逃してしまい、眼を上げたら勝負は終わっていた、ということもしばしばだ。**3**テレビの相撲中継では、懸賞の提供者紹介や客の呼び出しなどの館内放送や観客席のざわめきは遮断されていて、制限時間いっぱいになってから観客の声援を入れるよう演出してあるから、下のほうの取り組みでさえ、一抹の緊張感がただようわけだ。**4**ではなぜ館内がざわついているのか。答えはかんたん。一枱四人食べ物、酒やビールを呑みながら、声をひそめることもなくおしゃべりに興じているからだ。食べながら見る、見ながらしゃべる。取り組み表の紙をばしやばしやさせて、勝敗を記入する。**5**あいだに前をひっきりなしにお茶屋のひとつが食事やお茶やみやげ物を運ぶ。ざわついて当然だ。（中略）

演ずる者と見る者、つまり演じられている舞台とそれを鑑賞する観客とを空間的に分離すること、そういう制度になれてしまうと、大相撲とか歌舞伎の楽しみかたに、はじめはとまどう。**6**けれども、今わたしたちが劇場やコンサートホールで入場券を買って鑑賞する西洋の演劇や音楽にしたって、もともととは人びとでなんとなくざわついている宮廷の庭や居間で、あるいは街の芝居小屋や路上で、催しとして行われていたわけで、必ずしも純粋な鑑賞の対象であったわけではない。**7**渡辺裕によれば、たとえば十八世紀の演奏会は極端な言い方をすると「音楽のあるパーティー」といった趣の社交の場だったよう。客のおしゃべりがうるさくて、音楽曲を聴く場合は歌詞を印刷したプログラムが配られることもあったそうである。

**8**「おしゃべりだけではない。聴衆は演奏中にさまざまな「副業」を行っていた。ツェルターは後に一七七四年のベルリンでのコ

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

ンサートの回想の中で、「無数のパイプから立ち上った煙草の煙のちやのちで指揮をすることは容易ではなかったらう」と述べている。**9**また一七八四年のエアフルトでの演奏会の記録によれば、ビールや煙草が認められていただけでなく、「とりわけ音楽が好きでない人々は気晴らしにトランプをやっており、ご婦人方は徐々にそちらに加わっていった」。**0**フランクフルトのコンサート協会が一八〇六年に定めた規則に「犬を連れてくることは禁止」と書かれていたというのも興味深い。そんなことをわざわざ断らなければならぬというのは、そういうことを何とも思っていない輩がいたということのあらわれである。（渡辺裕「聴衆の誕生」）

じつと息をこらして、作品の世界にひたりきるという「集中的聴取」の思想はまだなかったわけである。いま、たまたま思想ということばを使ったが、居ずまいを正して作品に集中するというような聴取の態度はかならずしも自明のものではなく、「芸術の享受」あるいは「作品の鑑賞」という一つの思想をバックボーンとして、制度化されてきた態度にほかならないということである。そしてそのために、演ずる者、演奏する者と見る者、聴く者とを空間的に分割する装置が、劇場やコンサート・ホールとして建造されたのだ。

「隔たり」ということが、ここでポイントとなる。演ずる者、演奏する者と見る者、聴く者、つまりは、見られるものと見るものとを空間的に分離する装置のなかで、二つの距離が発生する。主体と対象との隔たりと、主体と唯の主体との隔たりである。

見る主体と見られる対象との隔たりは、芸術の場合、「鑑賞」という概念と連動している。愉しみの「享受」というよりもむしろ、距離を隔てて「鑑賞」すべき客体として「芸術作品」が主体から空間的に分離されていくそのプロセスを支配していたのは、近代芸術における「美の自律性」という考えかただ。「美」はそれ自体としての独立の価値をもつという考えかただ。「芸術作品」は、それが創られた時代や環境を超えた独自の「美的」世界をもつ。それが置かれた状況にあるいはそれを前にした鑑賞者によって価値

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

## 長文 2.3週 reのつづき

を変えるなどということは、本来、「芸術作品」にとつてありえないことなのだ。そのためには、これらの作品は味覚とか嗅覚、触覚といった、そのつどの状況によって感覚内容が変化するような「低級」な感覚に支えられるようなものであつてはならない。そうではなくて、視覚や聴覚のような、距離をおいた感覚、対象と接触したり混じりあつたりすることのない「普遍的な感覚」によって支えられるのでなければならぬ、とされるのである。

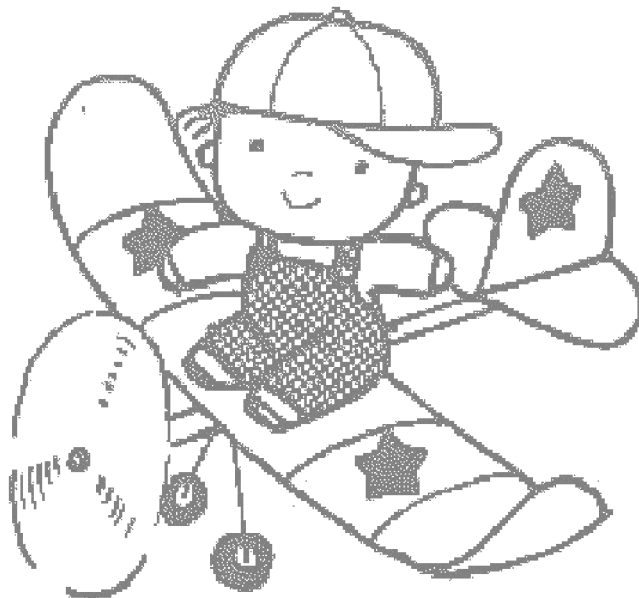
さて「隔たり」のもう一つの意味は、他者との隔たりということである。たとえばコンサートでも演劇でも、開演にあたってまず客席の照明が落とされる。これはまずは、見るものと見られるもの、演奏するものと聴くものとを空間的に分離するためもあるが（客席を暗くすることで、演奏家や俳優は自分は見られる人ではなく見られるばかりの人になり観客は見られることなく見るだけの人になる）、同時に、まわりにいる他の人間たちから個人を分離し、隔離するためのものでもある。観客が、他人にじやまされることなく、個人として作品鑑賞に集中できるように、作品世界に投入できるように、照明が落とされるのだ。だから建物は、純粹に「作品」の世界だけに集中できるように、周囲の騒音を遮断する構造になっているし、観客は観客で、持ち物、パンフレット、咳払いなどで余計な物音を立てることのないよう注意しなければならないのである。

一九六〇年代に音楽や演劇や美術の世界に起こった反逆、例えば演奏中に客が絶叫するようなライブ演奏とか、観客を演劇の中に巻き込み、ストーリー展開のなかに偶然的な要素をどんどん導入していくハプニングなどのパフォーマンスやテント小屋の実験演劇（路上で予告なしに劇が開始されることもあった）、アクションペインティングなどは、まさにこのような近代の「芸術鑑賞」という制度そのものに攻撃の照準を合わせていたのであつた。

（鷺田清一）



99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67



## 課題 レンギョウ 2.3週

### ★大相撲をはじめて見にいったとき（感）

## 今週は感想文の課題です。

### 解説 2.3週

内容：大相撲を見にいったとき、観客がざわついているのに驚いた。居ずまいをただして見るという態度は芸術がそれ自体自律した普遍的な価値を持つという考え方から生まれた。この考えから、コンサートホールのような演奏者と観客を隔離し、観客相互を隔離する装置が作られた。一九六〇年代になると、この「芸術鑑賞」に対する批判として、観客を演劇の中に巻き込むような実験が行われるようになった。

解説：クラシック音楽をコンサートホールなどで聴く場合、観客は静かにしていなければなりません。せんべいをポリポリ食べながらクラシックを聴くような人はいません。しかし、こういう聴取態度は、歴史的に形成されてきたものです。この「由らしむべし知らしむべからず」に似た権威主義的な芸術観に対する反抗が、観客を演奏の中に巻き込むような新しい芸術運動として生まれてきたのでしょう。

学校の授業にあてはめると、生徒が静かにかしこまって聴くハイレベルな講義がクラシックの演奏のようなもので、生徒がどんどん参加できる、楽しいが行き当たりばつたりの授業が実験演劇のようなものと言えるでしょう。

今は文化活動のさまざまな分野で、観客の参加を促すような試みが行なわれています。博物館の展示も、昔はガラスごしにただ見るだけでしたが、今は観客が手に取ったり動かしたりできるものが増えています。横浜洋光台の子供科学館でも、小学校低学年の子は展示品を見るより、ジャングルジムのような場所で鬼ごっこをするのに一生懸命です。

この観客参加の姿勢が、マイナスの方向に向かうと、清水市の成人式のように、式の最中に携帯電話をしたり立ち歩いたりする成人が多いことに市長が怒り、翌年の成人式を廃止すると発言するような事態になるのでしょうか。いま大学でも授業中の私語が多いため講義が聴けないというところが増えているようです。小中学校でも、先生の話をお聴きしているのは一番前の席の数人だけというクラスがあります。長文にある18世紀の演奏会のように、式場やクラスが社交の場になっているのです。

しかし、その一方で、観客参加がまだ不十分な分野が数多くあります。公園などは、もっと市民が自由に参加できるものにしてほしい分野ですが、木に登ってはいけません、犬を放し飼いにしてはいけません、芝生に入ってはいけません、ボール投げをしてはいけません、秘密基地をつくってはいけません、などと観客の参加を拒否するような看板がよく立っています。確かに、公園のあちこちに秘密基地を作られたら困りますが……。

観客参加のマイナス面を反対意見への理解として考えながら、観客参加の方向が時代の流れだということで意見を書いていくといでしょう。

### 解説のつづき 2.3週

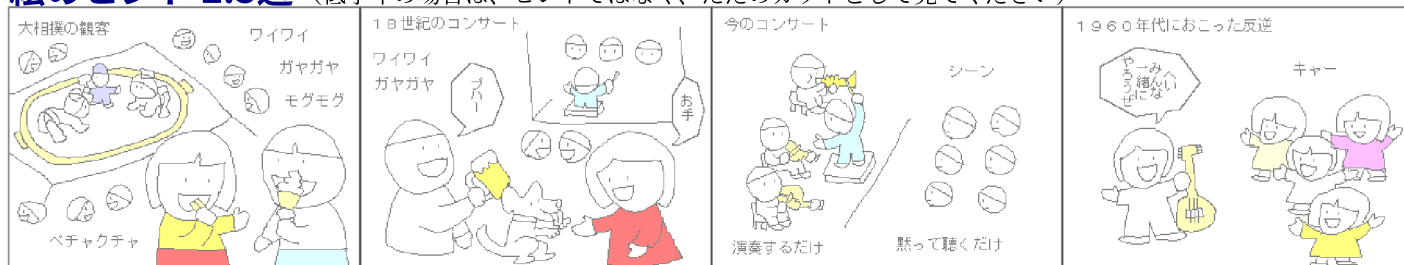
第一段落は、要約と意見。「私も将来、演奏をしたり展示をしたり公園を作ったりするときに、常に観客の参加を考えていきたい（生き方）。」

第二段落は、方法1と体験実例。「そのためには、第一に、参加による混乱を恐れないことである（方法）。私たちも、修学旅行の計画に企画段階から生徒が参加する形で行った。いろいろな回り道があったが、自分たちで決めたという充実感があった。」

第三段落は、方法2と伝記実例。「第二には、上に立つ人が何でも自分でやりすぎないことである。明治維新が成功したのは、西郷隆盛や勝海舟という、それまでの権威にとらわれない若い人たちが活躍することができたからである（伝記）。」

第四段落は、反対理解と名言。「確かに、静かに聴取する演奏会のような場があってもよい。しかし、これからは観客参加を考えていく必要がある。家の批評ができるのは、建築家ではなくそこに住む人なのである（名言）。」

### 絵のヒント 2.3週（低学年の場合は、ヒントではなく、ただのカットとして見てください）



## 長文 2.4週 re

その翌日であった。母親は青葉の映りの濃く射す縁側へ新しい莫莖を敷き、組板だの包丁だの水桶だの蠅帳だの持ち出した。それもみな買い立ての真新しいものだった。

母親は、自分と組板を距てた向こう側に子供を坐らせた。子供の前には膳の上に一つの皿を置いた。

母親は、腕捲りして、薔薇いろの掌を差し出して手品師のように、手の裏表を返して子供に見せた。それからその手を言葉と共に調子づけて擦りながら云った。

「よくご覧、使う道具は、みんな新しいものだよ。それから拵える人は、おまえさんの母さんだよ。手はこんなにもよくきれいに洗ってあるよ。判ったかい。判ったら、さ、そこで――」

母親は、鉢の中で炊ききました飯に酢を混ぜた。母親も子供もこんな噓せた。それから母親はその鉢を傍らに寄せて、中からいくらかの飯の分量を掴み出して、両手で小さく長方形に握った。

蠅帳の中には、すでに鯔の具が調理されてあった。母親は素早くその中からひとときれを取り出してそれからちよつと押さえて、長方形に握った飯の上へ載せた。子供の前の膳の上の皿へ置いた。玉子焼鯔だった。

「ほら、鯔だよ。おすしだよ。手々で、じかに掴んで喰べても好いのだよ」

子供は、その通りにした。はだかの肌をするする撫でられるようなころ合いの酸味に、飯と、玉子のあまみがほろほろに交ったあじわいが丁度舌一ぱいに乗った具合――それをひとつ喰べてしまうと体を母に抛りつけたいほど、おいしさと、親しさが、ぬくめた香湯のように子供の身うちに湧いた。

子供はおいしいと云うのが、きまり悪いので、ただ、にいつと笑って、母の顔を見上げた。

「そら、もひとつ、いいかね」

母親は、また手品師のように、手をうら返しにして見せた後、飯を握り、蠅帳から具の一片れを取りだして押しつけ、子供の皿に置

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

いた。

子供は今度は握った飯の上に乗った白く長方形の切片を気味悪く覗いた。すると母親は怖くない程度の威丈高になって、「何でもありません。白い玉子焼きだと思って喰べればいいんです」といった。

かくて、子供は、鳥賊というものを生まれて初めて喰べた。象牙のように滑らかさがあって、生餅より、よつぽど齒切れがよかった。子供は鳥賊鯔を喰べていたその冒険のさなか、詰めていた息のようなものを、はっ、として顔の力みを解いた。うまかったことは、笑い顔でしか現さなかった。

母親は、こんどは、飯の上に、白い透きとおる切片をつけて出した。子供は、それを取って口へ持って行くときに、脅かされるのに掠められたが、鼻を詰まらせて、思い切って口の中へ入れた。

白く透き通る切片は、咀嚼のために、上品なうま味に衝きくずされ、程よい滋味の圧感に混じって、子供の細い咽喉へ通って行った。

「今のは、たしかに、ほんとうの魚に違いない。自分は、魚が喰べられたのだ――」

そう気づくと、子供は、はじめて、生きているものを噛み殺したような征服と新鮮を感じ、あたりを広く見廻したい欲びを感じた。むずむずする両方の脇腹を、同じような欲びで、じつとしていられない手の指で掴み搔いた。

「ひ、ひ、ひ、ひ、ひ」

無暗に疝高に子供は笑った。母親は、勝利は自分のものだとしてとると、指についた飯粒を、ひとつひとつ払い落としたりしてから、わざと落ちついて蠅帳のなかを子供に見せぬよう覗いて云った。

「さあ、こんどは、何にしようかね……はてね……まだあるかしらん……」子供は焦立って絶叫する。

「すし！ すし！」

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34



## 長文 2.4週 reのつづき

母親は、嬉しいのをぐつと堪える少し呆けたような――それは子供が、母としては一ばん好きな表情で、生涯忘れ得ない美しい顔をして、

「では、お客さまのお好みによりまして、次を差し上げます」

最初のときのように、薔薇いろの手を子供の眼の前に近づけ、母はまたも手品師のように裏と表を返して見せてから鰯を握り出した。同じような白い身の魚の鰯が握り出された。

母親はまず最初の試みに注意深く色と生臭の無い魚肉を選んだらしい。それは鯛と比良目であった。

子供は続けて喰べた。母親が握って皿の上に置くのと、子供が掴み取る手と、競争するようになった。その熱中が、母と子を何も考えず、意識しない一つの気持ちの痺れた世界に牽き入れた。五つ六つの鰯が握られて、掴み取られて、喰べられる――その運びに面白く調子がついて来た。素人の母親の握る鰯は、いちいち大きさが違っていて、形も不細工だった。鰯は、皿の上に、ころりと倒れて、載せた具を傍らへ落とすものもあった。子供は、そういうものへ却って愛感を覚え、自分で形を調べて喰べると余計おいしい気がした。子供は、ふと、日頃、内しよと呼んでいるも一人の幻想のなかの母といま目の前に鰯を握っている母とが眼の感覚だけか頭の中でか、一致しかけ一重の姿に紛れている気がした。

(岡本かの子「鰯」)



99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67



---

課題 レンギョウ 2.4週 ★清書（せいしょ）  
4週目は清書です。



## 長文 3.1週 re

「一番目の長文が課題の長文です。」

1 先進国の後を追いかける途上国経済と、世界の先頭を走る先進国経済のもっとも重要な差は何かというところ、「途上国経済では物まねができたけれども、先進国経済では自分で新しい知識を創造しないとそれ以上の発展ができない」ということである。2 途上国の有利な点は、第一に、先進国モデルが存在し、容易に産業化のための目標がみいだせること、第二に、先進国から技術を導入できること、そして第三に、賃金など全体的なコストが先進国に比べて有利であることなどである。

3 このような有利性が存在しているかぎり、自らオリジナルな技術や知識を創造する必要性はそれほど高くない。先進国から使える技術を輸入し、それに安い賃金の勤勉な労働力を張り付けるだけで競争力を身につけることはできるだろう。4 もっとも、これとてどこの国にでもできるほど簡単なことではないが、日本や現在急成長中の東アジア諸国はいずれもこのシナリオで成功してきた。

しかし、日本についていえば、これらの好条件はすべて消滅したといつてよいだろう。5 十年ほど前に、日本経済は歴史的なコスト条件の逆転を経験した。またインプット拡大による成長にも人口の高齢化、労働力人口の減少、貯蓄率の低下などの理由から多くを期待することはできない。6 その結果、日本は先進国の宿命すなわち自らの行く先を自らの創意工夫で切り開かなければならないという宿命を、好むと好まざるとにかかわらず背負うことになったのである。

7 日本の社会経済体制は、欧米に迫いつき、追い越すという明治以来の国策にそって形成されてきた。たとえば、日本の教育制度は欧米の先進的知識を詰め込むことを目指して発達してきた。これはすばらしい戦略であった。8 欧米と日本の間に、科学技術や近代思想などの点で大きな知識のギャップがあったのだから、まずはこのギャップを一刻も早く埋めることが必要であったし、そうすることがキャッチアップを効率的に進める唯一の方法であった。

9 しかし、日本がキャッチアップを終えた今となっては話は変わってくる。外来の知識を学ぶだけでは必ずしも独創的な知識は生まれない。日本の学校教育（とくに義務教育）はすばらしいという説があるが、それは少なくとも今日の観点からはとんでもない誤解である。10 たしかに、先進国に追いつく目的のために、先生が生徒に

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

知識の押し売り、詰め込みを強要することは理にかなっていったかもしれない。いや、欧米との巨大な知識ギャップを一刻も早く埋めるためには、大車輪で知識の吸収に努めなければならぬことは当然であった。知識吸収を急ぐあまり、時に青年たちの独創性、オリジナルなものの考え方を育成するもうひとつの教育の重要な役割が多少なおざりにされたとしても、それはある意味ではやむをえなかったことといえるかもしれない。

しかし、今日のように、自ら価値を創造することが要求される時代になっても、教育システムが本質的な意味で何も変わっていないとすればそれは大きな問題であろう。最近の教育改革論議は当然のことながらこのような観点からなされることが多い。しかし、教育の現場では、相変わらず先生が大教室で黒板に知識を羅列し、日本的な意味での「優秀な」生徒は、試験のときにそれを正確に再現することを要求されている。生徒の能力差や、興味の所在などは無視し、とにかく上から与えられた課題を、先生が決めたスピードでこなしていくことがある。「優秀な」生徒の絶対的条件である。極度に一律化された教育風景である。

日本の教育現場で自分の頭で考えた独自の意見を前面に押し出すことが高得点につながるという話はおよそ聞いた試しがない。試験では先生が正解と認定する答を書くことが得策であって、先生の頭になかったようなユニークな答を尊重する風潮はない。生徒は一定の枠のなかで発想する習慣をたちまち身につけてしまう。このように「優秀な」生徒はいくつかの入試を経て、完璧なまでに「知識吸収型」の枠にはまった答しかできない受動的人間になってしまう。

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

**1** 今日では、道徳的共同体をつぶしてきた法的社会がふつうの社会となり、国家となっている。しかし、今日、共同体が完全につぶされたわけではない。豪族など大きな共同体はすでにつぶされてしまっているが、依然として最小単位共同体の家族は残っている。**2** そして一方、共同体意識の方は、今も人々の間にしぶとく生き続けてきている。

共同体の本質は感覚であるから、理屈、理論すなわち知よりも情が尊ばれる。漱石の言う「智に働けば角が立つ」わけである。**3** しかし、法が現代の社会を動かすものとなっていることを認めざるをえないから、「情に流されまい」とする努力が必要となる。この両者の間をゆれているのが、現代の人間である。

しかし、孔子はそうではなかった。**4** 彼が生きていた時代は、法が登場しはじめたころであり、当時、法優先は異端の思想であった。それは、共同体という体制の根幹をゆるがす「悪の思想」とみなされていたのである。孔子はその「悪」の摘発者であった。こういう話がある。

**5** 晩年、おそらく六十代も半ばを越えたころ、孔子は為政者としての地位を求めて、諸国を流浪していた。あるとき、葉という小さな街に立ち寄ったらしい。この街は、南方の強国であった楚国の一行政地区である。その街の長官の葉公が、孔子にこう言った。**6** 自分の街に「直躬」（正直者の躬）という仇名の者がいる。その父親が羊を盗んだとき、その子は父の犯罪を隠さないのみならず、盗んだことの証言をした、と。

ところが孔子は言い返した。私の仲間の「直」という仇名の男の行動は違います。**7** 「父は子のために（子の犯罪を）隠し、子は父のために（父の犯罪を）隠す。直（の本当のありかたは）、その中に在り」と。

この問答を読んだとき、現代人のわれわれの大半は、おそらく葉公の言い分、すなわち父といえども犯罪者は法の裁きを受けるべきであり、証言に立つ子の立場を正しいとするであろう。**8** それは人間社会における法優先の立場である。近代国家では、それが正

しい、善いことである。

しかし、前述のように、孔子のころは、まだ各種共同体が現実機能していた時代である。仮に犯罪が起つても、共同体でそれを裁く長老は、いろいろと事情を考えて罰を決める。**9** 時には、罪として公にしないで、事件を闇から闇へと処理するだろうし、時には、皆への見せしめに、窃盗程度でも死刑にすることすらある。そのように裁量のはばが広い。その罰を決めるのは、共同体をリードする道徳にどのようにつながっているかという点においてである。

**10** だからたとえば共同体の有力者が、明らかに罪を犯し、裁かれるとき、その有力者の犯罪の証言を拒否する部下は、法優先の公の立場からは指弾されても、同じ共同体メンバーの立場からは、逆に賞賛を受けることであろう。このように、法的社会と道徳的共同体との関係は、いまもってなかなか善悪の判断のむづかしい問題を抱えているのである。

秦の始皇帝を代表者として、中国古代の秦・漢帝国が成立したころ、法的社会を作ろうとする側と、従来からの道徳的共同体とは、至るところで衝突を起こしたのである。まして、法がしだいに社会的に認知されつつあった春秋時代、すなわち孔子が生きていた時代では、法は、共同体側から見れば、自分たちの体制を崩す悪であるとするのが常である。各種共同体が機能しなくなってしまう現代では、法的処理の間にはさみこまれる共同体の処理が、逆に不正なこと、悪であるとされる。たとえば、今日、老父の罪を見逃してもらうために、贈賄すれば、どうなるか。子は罪を犯すことになる。しかし、老父を捕えた検事や警察の側が、その父を老人であるがゆえに、その罪を公にしないとすると、一転して、温情ある処置として美談となる。共同体的感覚による行為である贈賄と美談とは紙一重の差なのである。

このように、法的社会が形成されて以後、共同体との関係というやっかいな問題を人間は抱えこんできて今日に至っており、いまなおその解決方法に苦しんでいる。

さて、共同体の指導原理は、道徳であるから、指導者はその条件

### 長文 3.1週 reのつづき

として道徳性を身につけなくてはならない。ちようど、法的社会の指導原理が法であり、指導者はその条件として、法を守りかつ政策能力を身につけなくてはならないのと同じように。あえて言えば、共同体社会は規模が小さく、前例主義なので、新しい政策の立案といったようなことはあまりなかった。

この道徳的指導者は、法のように強制するのではなくて、しぜんと見習わせて、人々を感化することになる。だから孔子は葉公に対して、「近き者（近くの人々）は説び、遠き者（遠くの人々）は（慕い）来る」と述べている。これが道徳政治というものゝ姿である。

すなわち「共同体↓共同体のきまり（慣習）↓道徳」という体系に合せて「共同体の指導者↓共同体のきまり（慣習）の熟達者↓道徳的完成者（聖人）」という図式を考えだしたのである。そして道徳的完成者（聖人）を最高指導者とし、その人の道徳に感化され教化される政治を道徳政治（徳治政治）としたのである。これは、「法的社会↓法的社会のきまり↓法」に基づく「法的社会の指導者↓法的社会のきまりの実行者や政策プランナー」という図式による法的政治（法治政治）と鋭く対立する。

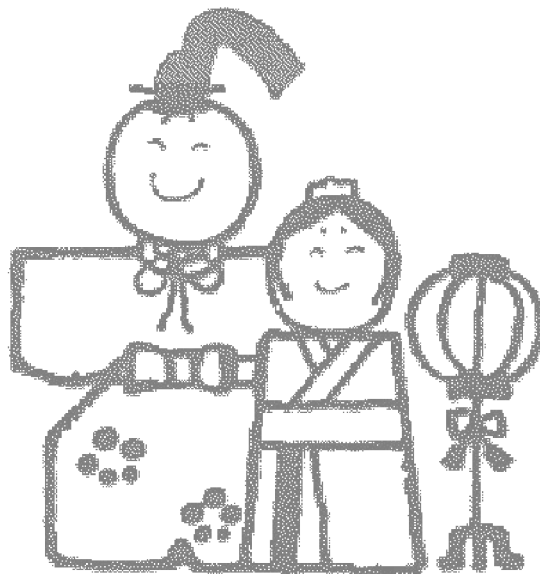
前者の道徳政治を主張したのが、儒家であり、その組織的理論化や、理論的指導を行なった最初の人が孔子であった。

後者の法的政治を主張したのが、孔子よりずっと後に出てきた法家（たとえば韓非子）であり、その方式に基づく大政治家が、秦王朝を建てた始皇帝である。

（「論語を読む」加地伸行より）



65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33



# 課題 レンギョウ 3.1週

## ★今日では、道徳的共同体を（感）

## 今週は感想文の課題です。

### 解説 3.1週

内容：今日の社会は、法的社会である。しかし、共同体意識は、今も人々の間に生き続けている。孔子は、葉で、自分の父親の犯罪を証言した正直な息子を批判した。法がしだいに 社会的に認知されつつあった春秋時代に、共同体の原理を体現したのが孔子であった。

解説：法的社会と道徳的共同体社会の対立がテーマになっています。例えば友達が万引をする現場を見たとき、それを先生に告げるというのが法的な発想でしょう。先生に問い詰められてもあくまでも友達をかばうというのが道徳的な発想でしょう（どこが道徳的じゃ）。

狭い変化のない社会では、道徳的共同体意識が生きています。小さな村の選挙では、政策で人を選ぶのではなく、「この前、〇〇をもらったから、今度は、選挙で一票入れといてやろう」というような発想で投票する人がかなりいます。みなさんのクラスでの学級会でも、「あなたの考えのほうがちがっていると思うけど、友達だからあなたのほうに手を挙げておいたわよ」などという友情がよく見られると思います。日本は、世界の中でも共同体意識の強い国でしょう。

これに対して、アメリカは法的意識の強い国です。多種多様な民族が同居している社会では、それぞれの民族によって道徳的習慣が違いますから、おのずからどの民族にも共通に理解できる法的な基準が中心になります。この法的社会が行き過ぎると、「自分の頭が悪いのは親の育て方が悪かったからで、親を裁判で訴える」という子や、「子供が事故を起こして親が弁償したが、その子供を裁判で訴える」という親が現われてきます。本当にあった話だそうです。

日本では、最近「身内に手心を加える」ことが事件になっています。アメリカの基準から見れば、日本は法的に遅れている社会ということになります。しかし同時に日本人の心の中には、身内をかばうのは当然という感覚があることも事実です。全体のバランスとしては、日本人は法的なほうにもっとウェイトを置くぐらいでちょうどいいのかもしれない。

### 解説のつづき 3.1週

第一段落は要約と意見（生き方の主題）。「共同体的な生き方をしたい。」（まんまや）

第二段落はその方法と体験実例。「そのためには第一に、法律よりも人間を見ることだ。私もこの前週番のとき、遅刻をした友達がいたが、知り合いなので見逃がしてあげた（いいのか）。」

第三段落は方法2と伝記実例。「また、法律を執行する人の人間性も必要だ。伝記によると、大岡越前守（おおおかえちぜんのかみ）は、子供を争う二人の母親に、「子供を引っ張って自分の元に引き寄せた方が本当の母である」と言い、痛がる子供の声に思わず手を放した母を本当の母と認定した。」

第四段落は、反対理解と名言の引用。「確かに、法律に基づかない運営は不明朗なものになることが多い。しかし、私たちはもっと共同体的な考え方を再評価すべきだ。家の批評ができるのは、建築家ではなくそこに住む人である（名言）。」

### 絵のヒント 3.1週（低学年の場合は、ヒントではなく、ただのカットとして見てください）





**1**イロリの社交は、家族結合の社交であった。一家団欒（だんらん）ということばは言うまでもなく家族がおなじ火をかこんでいることを指した。ひとつの火を通じて心がかよいあう。そういう不思議な力を火はもっていた。家族だけではない。**2**客人もまた、おなじ火をかこむことで、他人ではなくなる。火は人間を近づけるのである。若者たちが夏の山や海で火を燃やしてひらくファイヤー・ストームなども、まさしく火による人間結合の現代的なあらわれのひとつであろう。

**3**イロリの社交には、秩序（ちつじょ）があった。よく知られているように、イロリの四辺には誰（だれ）がどうすわるかについての約束事がある。土間に面していちばん奥（おく）の辺は横座である。そこには戸主以外の人間がすわってはいけない。**4**横座からみて左がわの辺にすわるのは主婦によって代表される家の女たちである。この座席は力力座などと呼ばれる。そして客人の席、すなわち客座は横座からみて右、横座の正面は使用人や場合によっては嫁（よめ）の座の下座——そんなふうに席の割りふりがきま

っていたのである。**5**こんにち、比喩（ひよ）的に、たとえば「主婦の座」というようなことが使われるのは、このようなイロリの座の割りつけから延長されたものだと考えてよいだろう。

それぞれの座がきめられ、冬の夜などイロリをかこんで世間話がつづく。**6**火を共有しているという事実が、そして、ときにはバチバチと音をたてて燃える炎（ほのお）が、いわばその世間話の背景音のようなものになる。火は、家庭の健在（けんざい）をしめす象徴（しょうちゆう）なのでもあった。

これとまったくおなじことが、西洋でも考えられる。**7**かつてマーガレット・ミードはフランス文化を論じて、フランス文化の基本になっているモチーフは Foyer（火の）であるといった。このフォアイエというのは、一家団欒（だんらん）を意味し、同時に火床（ひとこ）を意味することばだ。**8**同一の火床（ひとこ）ないしは暖炉（だんろ）を共有する家族の結合がかたいのである。フランスだけではなく。ヨーロッパやアメリカの住宅で中流以上と

いういささかゆとりのある家にはたいいて暖炉（だんろ）がある。**9**そして、こんにちでは、ちゃんと中央管理暖房（だんぱん）がゆきとどいているにもかかわらず、ときどき暖炉（だんろ）に薪（き）をくべて火の共有の事実を演出するのである。じつさい、イロリと暖炉（だんろ）はその機能においてきわめて類似している。

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

**0**もちろん、火をまんなかにしてかこむイロリと火にむかつて半月型にならぶ暖炉（だんろ）とは、社会構造は少し違うかもしれない。だが、おなじ火のぬくもりと光を受けることのできる場を家庭の象徴（しょうちゆう）とすることは、たぶん東西共通なのである。

火が人間を接近させ、親密さを強める効果をもっていることをわれわれは直観的に知っている。ラジオが大衆化したとき、アメリカの大統領 F・ルーズベルトは、定期的な「炉辺（ろへん）談話」番組で国民に親しく話しかけた。番組の題名にある「炉辺（ろへん）」ということばだけで大統領と国民はぐんとその距離（きょり）を縮めることができたのだ。（中略）

火の共有による親密な人間関係は、調理の火を考えてみればよくわかる。「同じ釜（かま）の飯（い）を食った」関係、というのは、遠慮（えんりよ）のない親しい関係ということだ。おなじ火で調理されたものを飲食（えんじき）するというのは、暖房（だんぱう）や照明の火の共有よりもさらに深い共通感覚を人間たちに与（あた）える。

カマドをわけ、あるいは別火にするというのは、人間のまじわりの単位をわけ、ということである。調理の火の共有、それは人間をつなぐ基本的に重要な文化項目（ぶんかこうむ）であった。

この点でも、日本文化はいろんな工夫（くわふ）を凝（こ）らし、それに美的洗練（えんれん）をあたえつづけてきたように思える。たとえばさまざまな鍋料理（なべりょうり）は、人間が共通の火で調理されたものをわかちあうことで親密さをつくりあげてゆくためのすばらしい知恵（ちえ）であった。

茶の湯もまた、ある意味で火の共有を象徴（しょうちゆう）する社交の形態であった。小さな風炉（ふうろ）とカマ、そこからまさしく茶の湯がうまれる。茶会はおなじカマからつくられた、おなじ味覚（あじかく）を共有する深い人間関係を形成（けいせい）してゆくのである。暖房（だんぱう）、照明、調理、それらは、いずれも人間生活（せいかつ）にとつてきわめて実用的な火の機能である。だが、人間はそういう実用性を超えて、火を人間関係調整の手段としても展開させてきたのであった。火の管理はたんに物理現象としての火を管理するというだけでなく、その火をめぐる人間集団の管理をもふくむものであった。

（加藤秀俊「暮らしの思想」より）

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

課題 レンギョウ 3.2週

★イロリの社交は、家族結合の（感）

今週は感想文の課題です。

解説 3.2週

内容：イロリの社交は、家族結合の社交であった。ひとつの火を通じて心がかよいあう。そういう不思議な力を火はもっていた。火が人間を接近させ、親密さを強める効果をもっていることをわれわれは直観的に知っている。火の共有による親密な人間関係に関して、日本文化はいろんな工夫を凝らしてきた。人間は実用性を超えて、火を人間関係調整の手段としても展開させてきたのであった。

解説：冬になると、家族みんなで鍋をつついて食事をとるという家庭も多いでしょう。夏になると、河原でバーベキューパーティーをするというところもあるでしょう。火を囲んで話をすると、お互いにぐっと近しい関係になった気がします。文化祭のあと、校庭で火を囲んだ体験を思い出す人もいるかもしれません。水くさい関係というのは、火を囲んだ関係の反対です。（ホントかいな）

人間は「1 + 1 = 2」という合理的な関係だけで生きているわけではありません。食事もただ食べればいいというだけで、家族が一人一人ばらばらに、自分の好きなときにレンジでチンという食べ方をしていたのでは味気ないでしょう。やはり、みんなで食卓を囲んで食べるところに味わいがあります。

火を囲むという、一見合理的には説明のつかない人間の心を大切にするような生き方をしていきたい、というかたちで意見を考えていくといいでしょう。

解説のつづき 3.2週

第一段落は要約と生き方の主題。「火は人間の心を和ませてくれる。私たちはこのような非合理的な気持ちも大切にして生きていくべきではないか。」

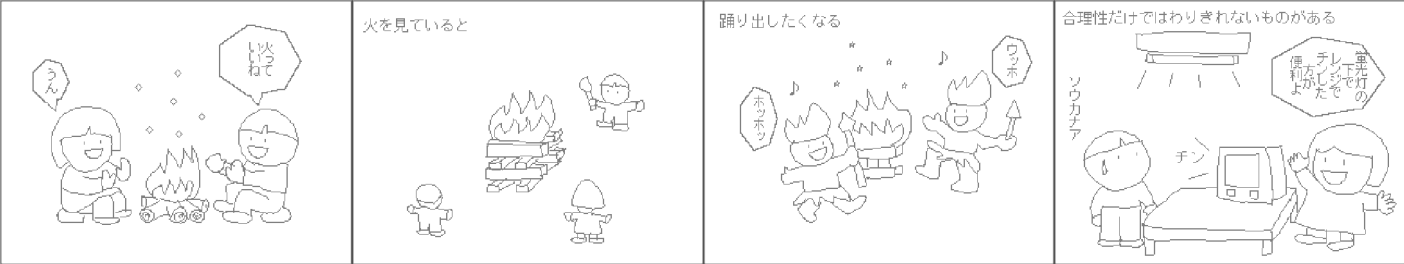
第二段落はその方法と体験実例。「そのためには第一に、自分の心の声に耳を傾けることである（方法）。私も、ものを買うときは直感で感じのいいものを選ぶことが多い。値段や理屈で選ぶとあとから後悔することがあるが、感覚で選ぶと飽きが来ない。」

第三段落は、方法2と伝記実例。「また、社会の仕組みも、非合理的なものを大事にするような余裕のあるものにするべきだ。この長文にもあるように、ルーズベルトは暖炉の近くでアメリカ国民に語りかけた（伝記）。日本の首相も、囲炉裏を囲んで国民に語りかけると受けるかもしれない（笑）。」

第四段落は、反対理解と名言の引用。「確かに、熱や光を取るという目的がはっきりしているときに、合理的にその目的になった手段を選択することは大切だ。しかし、私たちはもっと非合理的な気持ちも大事にしていくべきではないだろうか。」「雑草とは、まだ、その美点が発見されていない植物のことである」「非合理的なものの美点を私も発見したい。」

絵のヒント 3.2週

（低学年の場合は、ヒントではなく、ただのカットとして見てください）





## 長文 3.3週 re

**1** 今、日本の都会では、路上でものを売る人を見かけることがほとんどない。たまにあつても、ヒッピーのアクセサリーとかワゴン・セールとか、朝市とか、いかにも特別な売り方で、ただなんとなく道端に立ったりしやがみこんだりして客を待つという売り手がいなくなつた。

**2** 順序から言うならば、常設の店ができる前は商売はみんな路上で行われていた。道は人や馬の行き来のためだけにあるのではなく、立ち話やものの売買や時には喧嘩のための公共スペースだった。家の裏の小さな畑で出来た豆や芋を町まで運んでいつて道端で売る。**3** 売れたら、そのお金で、家では作れない野菜や道具類や贅沢品を買って帰る。商売はこうして始まったのだ。

しかし、道で売っているものは時として信用できない。村の顔見知り同士ならともかく、大きな町で見知らぬ者からものを買うと、万一、それがインチキな品でも苦情を持ち込む先がない。**4** 今でも訪問販売や通販の類にはこの種の問題がつきまといつていて。

訪問と言えば、三十年前に見事な詐欺にあつたことがある（どうもぼくは詐欺にひっかかりやすい性格らしい）。日曜日の昼ごろ、庭で草取りをしていると、威勢のいい魚屋風の男がやってきて、道から声を掛ける。**5** うなぎを買わんかと言うのだ。今と違つて冷凍の蒲焼がいつでも手に入るわけではなく、うなぎはなかなか贅沢な食べ物だった。それが安い。たしかに安い。男は垣根越しに、なぜ安いかという理由を、特別のルートとか何とか、言葉巧みに話す。

**6** 日曜だからどこの家でも父親がいる。一つ奮発しようということになって、家族の数だけうなぎを買う。それから御飯を炊く算段になる。この時差が大事だ（保温式の炊飯器はまだなかった）。買ってすぐに食べるものではこの話は成立しない。**7** 一時間後、いよいよ白い御飯がどんぶりに盛られて、蒸して温めたうなぎが乗り、タレがかかつてみんなの前に並ぶ。子供たちはわくわくして箸を取る。ところが、一口ほおばると、これがあなごなのだ。見た目はそっくりだが、味はだいぶ違う。**8** あなごはあなごでうまい魚だけれども、うなぎに化けてはいけない。もちろん男は二度と来なかつた。

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

た。路上の取引には、いつもこのくらいのリスクがつきまとう。日本のように万事がお金本位になつてしまつていない国では、まだ路上の商売は賑わつているし信頼もされている。**9** イスタンブールでは子供たちが街頭に並んで、声を張り上げて煙草を売っている。それがなぜか毎日のように品が変わる。ある日は全員がケントを売っている。次の日はそれがサムソンという国産ブランドに変わる。**10** トルコの子供たちはよく働く。寒風の中で鼻をすすりながら、サムソンサムソンサムソンと黄色い声で呼ぶのが、今でも聞こえる。

スーダンの煙草の売り方はまた違う。首都のハルトウムは全体が砂漠色にくすんだ町で、その広い挨拶ばい道の脇に、煙草屋は黙つて坐つていて。買うのはほとんど常連で、取引の単位は一本である。スーダンの人にとって煙草は相当な贅沢で、一度に一箱をまるごと買える者は少ない。だから、一本ずつ買う。朝、仕事にゆく途中で一本買つて、その場で吸う。マッチで火をつけるのは無料サービス。煙草屋の周囲に立つたり坐つたりして、本当においしそうに吸う。まわりにいい匂いの煙が立ち込める。吸い終わると、元気に仕事に行く。お金に余裕がある時には、昼にも一本買う。

まだ禁煙していなかったぼくは、ある日、この煙草屋から一箱買うとした。橋を渡つてオムドウルマンの町までラクダ市を見に行くのに、道中で吸う分を持参するのだ。

一度にたくさん売れば、簡単に儲かるわけだから煙草屋も喜ぶだろうと思つたのだが、それはみんなが煙草代に困つていない国から来た者の、浅ましい考えだった。

ぼくは、一箱は売れないと言われた。つまり、この煙草屋にしても、毎朝早く、その日に売る分だけを仕入れてくる。だから、ぼくが二十本も買つてしまうと、昼休みの一服を楽しみにしている誰かの分が足りなくなる。事情を知つたぼくは、一本だけ買って、火をつけてもらい、ゆっくりとその場で吸つて、橋に向かった。いい気持ちだった。

（「インパラは転ばない」池澤夏樹より）

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

課題 レンギョウ 3.3週

★今、日本の都会では、路上で（感）

今週は感想文の課題です。

解説 3.3週

内容：昔、訪問販売で詐欺にあったことがあった。日本では路上の販売はあまり見かけないが、路上販売や訪問販売にはリスクがつきものだ。スーダンの路上で煙草屋から一箱買おうとした。一度にたくさん買えば煙草屋も喜ぶだろうと思ったのだが、ほかの人の分がなくなるから全部は売れないと言われた。事情を知ったばかりは、一本だけ買った。いい気分だった。

解説：路上の販売や訪問販売には詐欺に遭うなどのリスクがつきものです。しかし、それは逆に、買い手と売り手との間に生きた人間どうしのコミュニケーションがあるということです。いまは自動販売機や通信販売で人と対面しなくてもモノが買えるようになっていますが、これがもし、タバコ屋のおばさんのところからタバコを買おうとしたら、「あんた、まだ中学生でしょ。タバコなんか買っちゃだめよ」と言われるかもしれません。売り手はただ売れば良いと考えているのではなく、相手の立場を考えてモノを売っています。

日本の都会では、このような人間的なコミュニケーションが希薄になっています。バスの運転手によっては、人が停留所に向かって走っているのを知っているのに機械的にドアを閉めるようなことがよくあります。（いるでしょ）。その一方で、地域によっては、老人が手を挙げたらそこがバス停という人間味のある運行をしているところもあります。

今学期の課題の人間の生き方に結びつけて考えられるかな。

解説のつづき 3.3週

第一段落は要約と生き方の主題。「私たちは人間的なコミュニケーションを大切に生きていくべきではないか。」

第二段落はその方法と体験実例。「そのためには第一に、人との触れ合いを大切にしていけることである（方法）。私も、部活動などで後輩に会うと、とにかく声をかけるようにしている。」

第三段落は、方法2と伝記実例。「第二には、社会自体も機械に頼らず、人間どうしの触れ合いを重視したものをしていくことである。エジソンは、蓄音機などを発明したことからもわかるように機械の力を十分に活用した人だったが、子供時代は、小学校の先生による機械的な指導で退学を余儀なくさせられた。そのエジソンの可能性を引き出したのが母親の人間性だった（伝記）。」

第四段落は、反対理解と名言の引用。「確かに、大量生産や大量販売は、豊かな社会を生み出した。しかし、私たちは原点に戻って、社会の基盤となる人間のコミュニケーションということに目を向けるべきである。「経験は、最良の教師である」という言葉がある。人間が成長するための貴重な経験は、人間との触れ合いの中により多くあるのではないだろうか。」

絵のヒント 3.3週（低学年の場合は、ヒントではなく、ただのカットとして見てください）



## 長文 3.4週 re

要するに、ニューヨークは何もない街らしい。だから、その点、東京によく似ているといえる。実際、商店の飾り窓のかざりつけだの、道路から直接二階へ上る狭い階段の入り口だの、そんな何でもない街のたたずまいの中に、ときどき「おや」と思うほど東京にそっくりの情景が眼につく。そう思っ眺めると、東京がニューヨークを真似しているのか、ニューヨークが東京を取り入れたのか、一瞬どっちがどっちだかわからなくなるようだ。私の前を、ゴムの半長靴をはいた女が一人、前かがみの姿勢で歩いて行く。踏み荒らされた舗道は毀れてデコボコだし、おまけに一週間まえに降った雪が凍りついたり溶けかかったりして、よほど気をつけないと滑ってころぶか、氷まじりのヌカルミにぞつぷり足のクルブシまでつかってしまう。道の片側に高い板塀がつづき、中ではコンクリート建築の作業をやっている。間断なしに響く重苦しい金属音。道路をうめつくしてや々と動いているタクシーや乗用車。……

見るものは何もない（その気になれば芝居でも、美術品でも、世界の一品がふんだんにあるにもかかわらず）、ぼんやり休んでもいられない、そのくせ黙って空気を吸っているだけでも金がへって行くようなニューヨークの街は、およそ観光客には不向きのようなだが、住んでみたら案外暮らし好いかもしれないと思わせるところもある。近代美術館がそうだったように、ここには伝統や権威や際立った性格的なものは何もないかわり、外来者が眼に見えぬ圧迫感を加えられることもなさそうだ。ナツシュヴィルのようにホテルのロビーでまわり中から眺められることもないし、どんな恰好をして歩いていても平気だ。黒人の男が白人の女とつれだっているのを見掛けたが、これはナツシュヴィルでは夢みたいなことだ。……朝、コーヒー・ショップで食事をしていると、眼にクマどりのある顔色の悪い女の子がドーナツを半分だけ惜しそうに食べ、あとの半分を紙ナフキンに包んで、木綿のワンピース一枚の姿で雪と氷の戸外へ、ゆつくりと出て行った。彼女の痩せた肩先には、無残で優美な都会の無関心さが肩掛けのようにかかっている。

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

アベイ・ホテルの地下室にはストックホルムの海賊料理のレストランがある。その他、ちよつと足をはこべばヨーロッパの各国から集まった各国の料理店がそれぞれ軒を並べている。しかし前を通っても別段、どの店へ入ろうという気もしない。アメリカへ来て「戦前並み」のフランス料理を食うというのが馬鹿馬鹿しいからではなく、興味がまったくわかないからだ。それなら日本料理屋はどうかというところ、最初から私はこれに最も反発を感じた。話に聞くだけでもイヤなことだと思っていた。しかし一度でも誘われて入ってみると、ここには麻薬のような吸引力がある。先月末、アメリカに着いて三日目だったが、M紙の特派員Y氏につれられて行った店で、ミソ汁を一口すすった瞬間、私は嘘もかくしもなく、全身から一時にシヨリが脱けて行くのを感じた。まるで毛穴が全部ひらいて、そこから自由な空気がいつべんに流通しはじめるみたいだった。それに給仕人に母国語で注文を發し、母国語でこたえられるのは何としても避けがたい魅力だ。汽車や劇場の中などで同国人に出会々と、本当のところ顔をそむけたくなくなる気持ちがある。それが食い物屋では逆の作用をあらわしてしまうのは、どういうわけだろう。ドルが円で呼ばれ、51 streetが五十一丁目と言いなおされるようなことを、どうしてうれしがするのかわからない。けれども腹が空いてくると、脚が自然に日本料理店の方へ向いてしまうのである。

（安岡章太郎「アメリカ感情旅行」）

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

---

課題 レンギョウ 3.4週 ★清書（せいしょ）  
4週目は清書です。

# 名言集印刷版=>ウェブ版

1	飽きるということも、一つの能力のあらわれである。
2	悪書を読まないことは、良書を読むための最初の条件である。
3	朝の来ない夜はない。
4	暗殺者は世界の歴史をかえなかった。
5	家とは、外から見るためのものではなく、中で住むためのものである。
6	家の批評ができるのは、建築家ではなくそこに住む人である。
7	いかに飽きずに続けるかではなく、飽きることと続けることとをいかに両立させるかということが大切だ。
8	英雄が歴史を作るのではなく、歴史が英雄を作る。
9	多すぎる休息は、少なすぎる休息と同じように疲れさせる。
10	限られた人生で、大事なことは、「何をするか」ではなく「何をしないか」である。
11	過去と他人は変えられないが自分と未来は変えられる。
12	カメラマンは、レンズのほこりを払うまえに目のほこりを払わねばならない。
13	今日という日は、明日という日の二日分ある。
14	記録は破られるためにある。
15	議会に期待しない国民は、議会を非難する資格を持たない。
16	経験は、最良の教師である。
17	行動するためには、多くのことに無知でなければならない。
18	幸福な家庭は、みな似ているが、不幸な家庭は、いずれもそれぞれに不幸である。（トルストイ）
19	子供は大人を小さくしたものではなく、それ独自の価値を持っている。
20	才能とは自分自身を信ずる能力である。
21	寒さに抵抗するいちばんよい方法は、寒さに満足することである。
22	寒さにふるえた者ほど、太陽の暖かさを感じる。
23	雑草とは、まだ、その美点が発見されていない植物のことである。
24	勝負に勝つためには、苦手をなくすことよりも、得意技を持つことである。
25	時間を作る第一の方法は、急ぐことではなく、どこに時間を使うか考えることである。
26	自国に対する賞賛が他国に対する軽蔑によって支えられているのであってはならない。
27	辞書のような人間になることではなく辞書をうまく使えるような人間になることが勉強の目的である。
28	自分の心のうちに持っていないものは何一つ自分の財産ではない。
29	上手なプレーをしたときよりも、悪いプレーをしたときの態度が大切である。
30	人生に意味はない。あるのは欲望だ。欲望があるから、バラはバラらしく花を咲かせている。
31	すべてに効くという薬は、何にも、たいして効かない。
32	鋭い刃物ほど安全である。
33	精読とは、ゆっくり読むことではなく、同じものを繰り返して読むことである。
34	戦争では、どちらの側が勝利を宣言しようが、勝者など存在しない。全員敗者である。
35	存在するものには、良いとか悪いとかを言う前に、すべてそれなりの理由がある。
36	大切なのは、健康らしい外見ではなく、健康自身である。
37	正しいものは、悩みも多い。
38	他人から尊重されるためには、まず自分で自分を尊重できなければならない。
39	短所をなくすいちばんよい方法は、今ある長所を伸ばすことである。
40	脱皮できない蛇は滅びる（ニーチェ）
41	知識がはしごを作ったのではなく、二階に上がりたいという熱意がはしごを作ったのだ。
42	強くなければ寛大ではありえない。
43	哲学者たちは、世界をさまざまに解釈してきた。しかし、大切なのは、解釈することではなく、変革することである。



44	できあがった規則をなんとか守ろうとすることよりも、実態に合わせて規則を変えていくことが、真に規則を生かす道である。
45	出口のないトンネルはない。
46	デモクラシーとは、奴隷にも主人にもなりたくないということである。（リンカーン）
47	トランプが活着ているのは、それが実際のプレーに使われているときである。
48	読書とは、自分の頭で考えることではなく、他人の頭で考えることである。（ショーペンハウエル）
49	読書は人間を豊かにし、討議は人間を役立つようにし、文章を書くことは人間を正確にする。
50	何事もしない者だけが失敗もしない。
51	なまけ者であることを批判するよりも、人間とはもともとそうしたものだということから出発するべきだ。
52	人間というものは、結果から事のよしあしを判断する。
53	人間は強くなるほど素直になれる。
54	人間は、求めているかぎり迷うものだ。
55	始めることも大切だが、やり遂げることの方が、もっと大切である。
56	花はだれが見ていなくても咲いている。
57	人が旅行するのは、到着するためではなく旅行するためである。
58	人はその制服のとおり人間になる。（ナポレオン）
59	人は食べるために生きるのではなく、生きるために食べるのである。（ソクラテス）
60	一人の敵も作らない者は、一人の友も持たない。
61	不幸な人は、どのような考えの中にも不幸の理由を見出す。
62	毎朝、歯をみがくのに、一週間分まとめて一挙にという人はいない。
63	短いスピーチが長いスピーチよりも難しいのは、言い直しがきかないからである。
64	道は近くても、行かなければ到達しない。
65	未来には、ひとりでにできる未来と、自分で作る未来との二つがある。
66	未来を予測する最も確実な方法は、未来を創造することである。
67	民主主義は、教科書には書かれていない。
68	名医ということばがあるかぎり、医学は科学ではない。
69	持ち物を気にするのは、実力に自信がない証拠である。
70	最も速い速読の秘訣は、不要なものは、読まないということである。
71	もともと地上に、道はない。歩く人が多くなれば、それが道になる。（魯迅）
72	問題とは、そこにあるものではなく、自分が作るものである。
73	やさしさが、性格の弱さであってはならない。
74	夢があるから行動するのではなく、行動するから夢が生まれる。
75	夜明け前が最も暗い。
76	良い馬は、長い坂を欲する。
77	良い友人を得たければ、まず自分が良い友人でなければならない。
78	弱い人は、率直（そっちょく）ではありえない。
79	ライオンは、一匹のウサギを倒すためにも、全力を尽くす。
80	理想に到達するための手段はまた、理想への到達を阻（はば）む障害でもある。
81	ロバが旅に出たところで、馬になって帰ってくるわけではない。
82	私たちの幸福が、ほかの人びとの不幸に支えられているのであってはならない。
83	私たちの人生は、私たちが費やしただけの価値がある。
84	悪いことそのものがあるのではない。時と場合によって悪いことがあるのである。

## ▼課題フォルダ

### (1) 課題集〇〇の山

★印がその週の課題です。★印が二つある場合はどちらを選んでもかまいません。

課題集は、授業のはじまる前までに見ておき、何を書くか決めておきましょう。

小学1、2年生は自由な題名が中心です。小学3、4年生は、決められた題名が中心です。感想文の課題の場合は、その週の長文を読んでから先生の説明を聞くようにしましょう。小学5、6年生の課題は、難しいものが多いので、よく読んで似た話を見つけておきましょう。

言葉の森のホームページにある「生徒ページ」のリンクから、「鳥の村」に入れます。「鳥の村」の「資料室」には、学年別課題の解説などが載っているので参考にしてください。




<https://www.mori7.com/tori/>

### (2) 項目表〇〇の苗

課題集の次のページに項目表があります。

項目表の★印の項目ができるように作文を書いていきましょう。★印の項目が十分にできる人は、◎印の項目もできるようにしていきましょう。

項目ができたところに、項目の説明又は項目のマークを書きましょう。清書のときは、項目の説明やマークは書きません。

(構成  題材  表現  主題  )

( 項目マークの絵は、枝、葉、花、実がわかるように自由にかいてかまいません。)

### (3) 課題フォルダの中身

課題フォルダには、週ごとの課題と解説と長文が載っています。その週の課題を見て、書くことを準備しておいてください。

- ・課題フォルダの長文は、毎日の音読に使ってください。感想文の課題のときの、もとになる長文も兼ねています。

